方正友好交流の会　会報第３号

星火方正

～燎原の火は方正（ほうまさ）から～

活気あふれる方正鎮の自由市場

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒竜江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と友好の動き、インターナショナルな友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第３号） ～燎原の火は方正から～

目　次

松花江のほとりで――第２回方正公墓の旅 …… 奥村　正雄 1

「日中友好交流と歴史検証の旅」に参加して …… 吉川　雄作 4

交流と慰霊、不戦を誓ったハルビン４日間の旅 …… 猪瀬　和道 6

中国東北地方への旅　開拓団最期の地に立って …… 加藤　文子 9

風化させてはならない歴史事実―方正日本人公墓と人々の心― …… 高橋　健男 12

旧満州二題 …… 寺沢　秀文 15

「満州」／「引揚げ」の記憶をたどって …… 南　誠 17
―泰阜村・方正・コロ島等を点として―

残留孤児の郷・方正の『礎』となった民族の懐の深さ …… 人民日報 20

徳をもって恨みに報いる義挙が日本を感動させる …… 国際先駆導報 23

日本人公墓 知る旅へ　満州の歴史 若い世代に …… 信濃毎日新聞 25

命懸けの逃避行 歌忘れず　三波春夫と旧満洲 …… 奥村　正雄（新潟日報） 26

方正友好交流の会と ODA の関わり …… 牧野　史敬 27

天を恨み 地を呪いました 幕張９条の会 発会記念講談台本 …… 奥村　正雄 28

お元気な松田ちゑさん …… 編集部 34

日本に残留し定住したある中国人 …… 大類　善啓 35
～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～

方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの …… 編集部 46

執筆者及び関係団体の紹介 …… 47

お礼とご報告 …… 48

書籍のご案内 …… 48

編集後記 …… 49

松花江のほとりで

～発見、交流、涙　第２回方正公墓の旅～

奥村正雄（方正友好交流会の会参与）

■　見知らぬ中国人からの手紙

方正へ出かける１ヶ月ほど前、ハルピンの石金楷という方から手紙をいただいた。「6 月に方正に来られるそうですが…」という書き出し。肩書きはハルピン市中国残留孤児養父母の会秘書長とある。それまでに私が方正行きを知らせてあった中国の関係者は３人で、私たちの方正行きを彼がどこで知ったのか不明だった。6 月 21 日、私たちがハルピン空港につくと彼が養父母の会の理事長とともに私たちを迎えてくれた。私たちの方正行きを彼に知らせたのは方正政府の外事弁公室主任・王偉新であることがわかった。滞在中、彼はときどき私たちの前に姿を見せたが、旅の終盤から帰国後にかけて、彼は思いもかけないことで私に力を貸してくれることになった。それについては後で改めて触れることにしたい。

■　尻と鼻がとらえた変化

マイクロバスで方正へ向かう途中、驚いたことが２つある。一昨年は高速走行中、ときどき座席から飛び上がって頭が天井にぶつかった。それが新しく舗装し直されて、同じ道とは思えなかった。もう一つは途中のトイレ。前回、トイレ休憩で入ったガソリンスタンドでは、昔懐かしい汲み取り式の香りにむせ返った。それが今回は嘘のように水洗式に変わっていた。お尻と鼻で中国の変わりようを見る思いがした。

方正について人民政府を表敬訪問。新装成った政府庁舎の一室で向かい合う。方正側の話は国内経済の紹介と投資要請。こちらは日中友好関係逆流の今こそ方正公墓に象徴される友好の原点を一人でも多くの人に伝える大事さ…を話した。通訳は前回同様、ハルピンで合流した京都大学の南誠さん。

南さん同様、今回も同行した方がもう一人。新潟の樗沢仁さんである。前回もそうだったが、樗沢さんは公墓の参拝を終えると、車を手配してもらってそのままハルピンへ戻った。単身、夜行列車でロシヤ国境に近い綏西へ向かうためだ。61 年前、彼は母を助けて弟妹と日本へ帰ろうとして帰れず、途中、母や弟たちと死別しながら九死に一生を得てようやく祖国にたどり着いた体験（著書『満州・荒野の旅』）が、今もこうした「原点への回帰」を反復させているようだ。

■　落差は天の思慮か

ハルピンのシャングリラ・ホテルから方正のＫ大酒店へ、この居心地の大きな落差は、まるで 61 年前に同胞が嘗めた辛酸を、天が私たちに追体験させようとてか、と思わせる。部屋の出入りに差し込むカードは毎回作動せず、そのたびエレベーター前で待機している少女にマスターキーで開けてもらわなければならない。スペインのセカンドハウスに１年のうち、多いときは 10

ヶ月も過ごすという地球人のＰさんは、明け方に肌寒いがかけるものがなくて「郷に入っては郷に従え、か」と、我慢したそうだ。

実はこのＰさん、出発の数日前、街のカメラ店でたまたま居合わせた中国残留孤児に頼まれて、方正郊外に住む、ある残留孤児を訪ねる成り行きになった。知人の証言のほか自分が日本人である証拠が示せないために厚労省が帰国させないこの孤児は、翌日、ハルピンに帰る私たちをホテルへ送りに来て、体を震わせて泣いていた姿が今も網膜から消えない。

■　旧友は愛妻家だった

方正での夕食に、古い友人を２人招待した。一人は日本語学校の名誉校長・王鳳山さん、そしてもう一人は外事弁公室の元通訳・陳福堂さん。王さんはちょうどこの日が奥さんとの結婚記念日のため愛妻と一緒に食事の約束があって来れず、食後に日本語学校の若い生徒を３人連れて、交流会に参加してくれた。

「日本の友人やあなたが世話して帰国した孤児たちが、みんなあなたが日本に来るのを待っているよ」と言うと、

「私も行きたい。しかし再来年だね」

という答えだった。愛妻の健康回復を計画のキイに据えているようだ。

■　時代を映す波止場

方正での２日目、前回同様、伊漢通の元船着場の見学に向かった。が、道路が工事中で、地元の人に迂回路を尋ねて行くうち、最後は子連れの親切な２人の主婦をバスに同乗してもらって目的地へついた。河岸に建つ赤レンガのしっかりした建物は、５年前、ハルピン～同江間の高速道路が開通するまで、松花江を行き来する船の待合所だったという。沖合いに工事の船が一艘。これは建設工事で需要が多い川砂の採取船で、満杯になるとこの岸まで運び、また沖へ戻って浚渫をしているのだという。

岸辺で何かを洗っている主婦がいた。そばへ行って尋ねると、昨秋、稲の取り入れの後、田んぼで拾い集めたドロだらけの籾殻を、ニワトリの餌にするため洗っているのだと言う。

今回、私はハルピンで手に入れて帰りたいものが2つあった。１つは抗日歌曲「松花江のほとり」のテープ。帰国残留孤児たちの集まりで頼むと、みんな覚えていて歌ってくれる。日中韓３国の共通歴史教材委員会が共同編集した「未来を開く歴史」に、澤地久枝「もうひとつの満州」から転載した日本語訳が載っているが、その原曲を本屋や自由市場の屋台で探したが、どうしても見つからない。そのぼやきをそばで聞いていたのが冒頭に触れた石さんである。帰国当日、彼はどこかからそのテープを手に入れ、それをほしい人の数だけダビングしてきてくれたのだ。彼はもう一つ、私が９９％無理だろうと思っていたものを探しだして、後日送ってくれたのだ。

それは１９６３年方正公墓の石の墓標がハルピンから船で伊漢通まで運ばれた後、船から陸へあげる作業の情景にかかわるものだ。私はこの話を当時、黒竜江省外事弁公室日本処で担当した趙喜晨さんに詳しく聞いたのだが、石にロープを回し、両側２人づつ４人で担いだそうだ。「そ

のとき、気合を整えるために、歌のようなものを歌った」と教えてくれた。しかし具体的には彼も口では言えなかった。その情景を想像すれば、場所と人間を日本に移しかえることで、私の脳裏にも子供の頃に見て、聞いた、似た情景と歌声がそこまで近づいてくる。丸山明宏の「かあちゃんのためならエーンヤコーラ」とも違う。時代劇の籠かきの「エッホ、エッホ」とはさらに違う…これを探せたら、この部分を書いた拙著の情景が格段にリアリティを増すことになる…私は自分でもおかしいほど、この点に異常にこだわっていたのだ。

しかしこのこと自体を、私のハンパな中国語で中国人に伝えられるだろうか。期待はできないだろうと思いながら、そのことを石さんに話したのは、「松花江のほとり」を探し出してくれた嬉しさからだったかもしれない。帰国後まもなく彼からの手紙の中に、たまたま見つけた地方紙の読者体験記のページが挟まれていた。「これだ！」私は思わず体が熱くなった。ある読者が文革時、山奥に下放され、重い木材を山から運び出したときに口から出た、歌ともうめきともつかない叫びの記録だった。私はこれを近く再編する拙著の該当パートに加えるつもりである。

左　石金楷さん　右　奥村
（伊漢通で）

左から　石金楷さん、南誠さん、同行の４人（伊漢通で）

「日中友好交流と歴史検証の旅」に参加して

吉川　雄作（千葉県）

人は全てを知ることはできないし、世の中には知らずともすむこと、知らぬほうがよいこともないではないが、「知らない」ではすまされないこともある。

今年６月、奥村正雄氏（『天を恨み　地を呪いました』の編著者）が主宰する「千葉健生病院健康友の会中国語教室」に参加していたことが縁で、同教室のメンバー３人とともに、総勢10人で方正の日本人公墓を訪れる旅に参加した。

恥ずかしいことだが、このことがなければ、私は「方正」という地名はもとより、日本人公墓そのものの存在すら全く知らないまま、過ごしていたにちがいない。今は、そのことを知りえたことに感謝している。方正日本人公墓の存在は、全ての日本人が知っていなければならないことのひとつであろう。

一行10人の中には、自身が旧満州からの引揚者（というより「大地の子」さながらの難民体験者）がおられ、また、奥様が同様の体験を持つ方や、ノモンハンの戦場で傷つき帰還した兄を、その後間もなく亡くされたという方もおられた。

いくらか年下とはいえ、自分の、いかにも平穏そのもののような戦時体験（むしろ戦後の食料難が戦争体験になっている）と比べて、僅かな年齢差、居住地・環境の違いなどにより、戦争に関わる体験や考え方は、一人一人大きく異なるものであるということをあらためて思った。だからこそ、他人の戦争体験を理解することは、よほどの想像力を動員しないかぎり難しいものなのかも知れない、とも思う。

敗戦を旧満州で迎え、いち早く帰国したというある知人は、日本の敗戦が分かったとたんに現地の人からひどい目に合わされたので、今も中国や中国人が嫌いだ、と言う。

一方で、一行の一人樗沢さんのように、自分がなんとか生きて日本へ帰ることができたのは、決して豊かではない現地の人々の温かい援助があったおかげ、という感謝の気持ちから、何十回も中国を訪れ、その時の恩義を形を変えて今も返し続けている人もいる。

そうした実体験を持つ人との出会いがあって直接お話を伺えたこと、そして、この後にもさらに広がりを持てそうなこと、それこそが、私にとっては、今回の旅が直接もたらしてくれた様々な見聞や感慨以上の、大きな収穫と言ってよい。

ハルビンから東へ走る高速道路。左右の窓外には、なだらかな起伏をなす畑がはるか地平線まで続き、防風と境界を兼ねたポプラ並木が農道沿いに長く延びている。広い畑のあちこちに、柄の長い鍬を手にした農民の黙々と作業をする姿が風景に溶け込んでいる。

北海道十勝あたりを思わせる「ミレーの絵のような」田園風景だが、このあたりは六十

年前、敗戦直前のソ連軍の侵攻とともに、関東軍にとり残された多くの老人・婦女子が、帰国のあてもないままにあちこちさまよった果てに、飢えと寒さ、疲労や病気に倒れ、或いはすべての希望を失って自ら命を絶つなど、悲惨な状況が展開された地でもある。

確かめるすべはないが、今、目の前に広がる風景のどこかで、そうした凄惨な事実があったかも知れないのだ。自分の知る限りの知識を動員して、そのありさまに思いをめぐらせていると、はるかに広がるのどかな田園風景にも、自ずと気持ちが沈んでしまう。

広い水田がなだらかな丘に遮られる辺り、松林に囲まれた中に、方正地区日本人公墓と麻山地区日本人公墓は、事前に写真で見たままに並んでいた。そして、ほぼ同じ形と大きさの中国養父母公墓と戦後稲作の指導にあたった藤原良作氏の墓が少し離れた林の中にあった。四基の墓標を前にしてしばし往時に思いをはせながら黙々と歩き回った。さまざまな感慨が心のうちに起こる。とりわけ、中国養父母公墓の前に立った時は強くこみあげてくるものがあった。

管理人が鍵を開けてくれた資料館に入ると、雨上がりのせいもあってか、中は湿っぽく独特のにおいがこもっていた。天井のあちこちに雨漏りの跡があり、傷みが進んでいるように見えた。この地を訪れる人が年間どれほどなのか、数的なことは確かめえなかったが、さほど多くの人が来ているとは思えない。この地が時とともに忘れられることのないことを願いつつ、支援の基金にささやかな協力をしてきた。

公墓を訪れた日の夜、方正日本語学校の学生４人が名誉校長の王鳳山氏とともにホテルにやってきて、交流会が行われた。われわれ中国語教室組は、まだ始めたばかりで、中国語で「交流」ができるまでにいたっていないが、十代後半の彼らの日本語レベルはなかなかのものと思った。女性は予め用意してきた折り紙で鶴の折り方を教えていた。私は話題の足しになるかと思って持参した過去の中国旅行の写真を見てもらいながら、片言の中国語で説明をした。最後にそれぞれが学習で使っているテキスト（当方はＮＨＫラジオ講座のテキスト）を見せ合った。彼らは今学習しているところを読んでくれたが、発音もしっかりしており、読み方も滑らかで、努力のほどが伺えた。当地で話題の日本映画のことを聞かれたが、こちら側には知識がなく全く答えられなかった。将来は通訳・貿易・教師など、それぞれに日本語を活かせる仕事を目指しているという頼もしい若者たちであった。

世代の差は埋めようもないが、それを越える温かい「交流」ができたと思っている。

帰国後、これも中国語教室に加わったのがきっかけで顔を出すようになった、千葉市高洲のｺﾐｭﾆﾃｨｰ･ｾﾝﾀｰで長い実績を持ち、主に中国からの帰国者子女の日本語学習をサポートしている「土曜学級」に、写真を持って行き、見せていたら、中の一人が写真の中の一人を指さして「この人知っている！」と言う。方正出身だという彼は、町の中を撮った写真を見てとても懐かしがっていた。思わぬところで「交流」に新たな広がりができた。

交流と慰霊、不戦を誓ったハルビン４日間の旅

中国東北地方の教育を支援する会事務局　猪瀬　和道

「歓迎！　歓迎！」。元気な声を上げながら、笑顔で迎えてくれた愛くるしい子供たち。ここはハルビン市方正県の郊外にある沙河子至誠学校。私たち「中国東北地方の教育を支援する会」の交流訪問団が念願の同校を訪れたのは、真っ青な秋空が広がった９月 27 日だった。訪問団は沖縄、鳥取、埼玉県などの日本各地や中国の大連、上海から集まった一行 19 人。９月 26 日から４日間の日程で方正県とハルビン市内を訪れ、子供たちとの交流に加え、「日本人公墓」や第七三一部隊遺跡を見学するなど、団員それぞれが心に深く刻んだ旅となった。

「中国東北地方の教育を支援する会」は今年６月の長春市を訪問した時に発足したが、活動そのものが始ったのは 2003 年に遡る。会長である伊藤州一さんが長春市双陽区にある中日友好至誠小学校へ校舎改築費を寄付してから毎年５、６月ごろに訪問団を結成し、同校の子供たちと交流したり、教育機材を贈ったり、地道な活動を続けている。

活動の主旨は、大きく分けて二つある。まずは恵まれない教育環境にある東北地方の学校と交流し、日本と日本人を理解してもらい、日中友好活動を担う大人になってほしい、という願いである。そしてもうひとつは私たちが、日中の子供たちの間に立って交流の架け橋となること。すでに長春市の中日友好至誠小学校では、伊藤さんの故郷である静岡県天竜市の横山小学校と作文や絵画などの作品交換を行うなど、未来に向けての活動は軌道に乗ってきている。

私たちが今回訪れた沙河子至誠学校は、長春に続く二番目の活動拠点で、ここもまた、伊藤さんの寄付金で移転新築された小、中学部の合併校。春には伊藤さん夫婦が訪問し、今回は団員を募って訪問団を編成した。

沙河子至誠学校での交流授業（小学６年生）

子供たちの歓声に頬がゆるむ猪瀬
（沙河子至誠学校で）

■日中友好を方正県から発信

しかし、出発前の９月上旬、伊藤さんが病に倒れてしまい、訪問団の出発が危ぶまれた。事務局を預かる私は「伊藤さんが回復された来年に延期しましょう」と進言したが、伊藤さんの次の言葉で決行することを決めた。

「この運動は私個人のものではない。方正県の子供たちも待っているし、日本の子供たちとの交流の架け橋役も果たして来て欲しい」

では、私たちの活動がなぜ中国東北地方なのか、それは伊藤さんの強い思いであり、会員の共通認識でもある。

「戦前、戦時中、中国東北地方の人々に多大な犠牲を強い、同時に多くの日本人も悲劇の淵に落としやられてしまった。こうした悲惨な状況下でありながらも、大勢の残留孤児が中国の養父母に育てられた。このつぐないと鎮魂、恩返しのために」

伊藤さんが方正県沙河子に学校建設費を寄付したのは、日中友好をこの地から発信することの意義を見い出したからである。

■子供たちとの交流に感動

沙河子至誠学校で訪問団を出迎えてくれたのは方正県人民政府関係者や教員、児童、生徒ら約250人。「歓迎！　歓迎！」との“声のアーチ”をくぐりながら校庭に入ると、真っ白い壁に赤い屋根の平屋建て校舎が目に入ってきた。青空と壁の白さ――その美しいコントラストがとても印象的だった。

会議室で馬万成校長らによる歓迎式典に出席した後、団員が待ちに待っていた子供たちとの交流授業。同校は小学部１－６年生の６クラス、中学部１－３年生の３クラスの計９クラスがあり、団員は１－３人ずつに分かれ、各クラスへと入ってそれぞれ準備してきた交流授業を行った。

あるクラスは、「幸せなら手をたたこう」「四季の歌」などを中国語、日本語で歌い、あるクラスはバドミントンで遊んだり、折り紙を折ったりした。また、沖縄の観光地を紹介したり、子供たちの質問に答えたりしたクラスもあった。わずか１時間半の授業だったが、終わったころにはすっかり打ち解け、団員の手を握って別れを惜しむ子供もいた。また、目を潤わせながら来年の再会を誓う団員の姿もあった。

馬校長からは子供たちの作文や絵画を託された。これは静岡県浜松市の水窪小学校へ届ける大切な交流作品だ。私たちは来年もまた、水窪小学校児童の作品を携え、ここにやって来るだろう。悲しい別れだが、来年、再来年へと続く意味のある交流の第一歩でもあった。

■鎮魂の杜で誓った平和

この後、私たちは黄金色に輝く稲田を通り過ぎ、多くの戦争犠牲者らが眠る「中日友好園林」を訪れた。正門から園内に入り、色づき始めた楊樹並木を通ると、突き当たりが日本人公墓の碑になっていた。ここには5000人とも言われる日本人犠牲者が眠るという。

全員が初めての参拝だった。日本から持ってきた日本酒をお供えし、日本の水でお清めをした。線香を手向け、手を合わせて慰霊する団員。言葉はなく、悲しみは日差しを遮る松林の中へ染み込んで行った。ハルビン育ちのT子さんは溢れ出る涙をハンカチで拭った。友人の兄弟3人が方正で短い生涯を閉じ、この場所に永眠しているのだ。

さらに中国人養父母の墓、方正県に稲作技術を伝えた藤原長作さんの遺骨が分骨されている記念碑を参拝、戦争のもたらす悲劇と日中友好の大切さを改めて噛み締めたのだった。

■活動の方向性を再確認

私たちはバスで一路ハルビン市へと向かい、2日目の27日はハルビン市内に宿泊、翌28日は市内を観光し、最終日の29日に第七三一部隊遺跡を見学に訪れた。

団員の中には以前、ここへ来たことがある人もいたが、ほとんどは初めてだった。日本語が流暢な解説員・馬天龍さんの説明を聞きながら各展示室を回ったが、その残虐さに団員の心は重く沈んで行った。「なぜ？」。こんな素朴な疑問が何度もわき上がってきた。

戦争がもたらす悲劇と残虐性、そしてそれを教訓とする将来への展望。「前事不忘、後事是師」。この言葉を素直に受け入れることができ、私たちの活動の方向性の正しさを確信することのできた4日間の旅だった。

日本人公墓を参拝する訪問団員

中日友好園林で

《猪瀬和道さんは2002年、定年まで9年を残して読売新聞を早期退職し、大連に語学留学。「日本と中国の本当の姿を、日本人、中国人に伝えたい」と、大連で活動。現在、日本語月刊情報誌「WHENEVER DALIAN」編集長。また、伊藤州一さんと「中国東北地方の教育を支援する会」を発足。長春へ3年続けて訪問団を編成、今回のハルビンが4回目である》

中国東北地方への旅――開拓団最期の地に立って

加藤　文子（NPO 法人中国帰国者の会）

私たち「ＮＰＯ法人中国帰国者の会」は戦後 61 年を迎える今年の夏を前に、6 月 22 日から２７日まで、中国東北部を訪ねました。

私たちの会は、国策により開拓団として満州に送られ、敗戦後は中国に置き去りにされ、長年放置された婦人や孤児たちの早期帰国実現を目的に、残留婦人としてやっとの思いで帰国した鈴木則子が、帰国４年後の 1982 年に設立した会です。国による帰国の施策が遅々として進まず、民間組織の活動なしには、婦人や孤児の祖国への帰国も、また帰国後の自立もままならない現状を帰国後初めて知り、誰かがやらなければと、設立したのでした。

私たちは、この会の活動を通して、戦争が 60 年以上も人々に影響を及ぼしつづけること、２代、３代にも渡ってその根が広がっていくことを実際に見てきています。

今回の私たちの旅は、中国東北地方が、国策により開拓団として入植された多くの方の命、そして当地の多くの方々の命が奪われた地であることを思うと、大変重い気持ちを抱えての旅でもありました。その地を訪ね、自分たちの目で見て、今、私たちに何ができるのかを考えようと思いました。

「東北地方に行くなら、方正県の日本人公墓を訪ねて私に代わってお参りしてきてほしい」という鈴木会長の言葉によって、日本人公墓を旅の行程に入れました。話を聞くうち、この活動に関わる者として、ぜひ訪ねてみたいと思いました。

麻山地区公墓の前で

敷地内には、たくさんの植樹が

方正地区日本人公墓

行程４日目の朝、ハルビン駅近くのホテルからからタクシーで約３時間、舗装されていない、車が通ると砂煙が上がる道をひたすら走り、ほとんど人家のない農村のはずれに、方正県日本人公墓はありました。黒い柵囲いの入り口は施錠され、雑草一本なく、きれいに手入れされている公墓に、管理人が鍵を開けて案内してくれました。

一つ目の柵内には、方正地区日本人公墓と麻山地区公墓がありました。1945 年の敗戦後、関東軍に見棄てられた各地の開拓民が、ハルビンに向けて方正に集結し、極寒のなか、餓えと寒さ、疫病のため亡くなられました。その 4500 名にのぼる方たちの骨を集めて、1963 年に建てられ

たのが方正地区日本人公墓だそうです。

麻山地区公墓は、黒龍江省牡丹江近くの麻山で、ソ連軍と中国軍の挟撃に遭い、日本軍に見棄てられた哈達河開拓団の四百数十人が集団自決した麻山事件、その犠牲者の遺骨を1984年に現在の場所に移したときにつくられたものだそうです。どちらも女性、子どもが圧倒的に多かったと聞いています。

私たちはまず持参した花束を墓石に手向け、手を合わせました。・・・何を言ったらいいのだろう。お国のために、遠い地に入植し、敗戦後は国に見棄てられ、事実も知らされずに遠い異国で命を落とさざるをえなかった方たちと、どう対峙したらいいのだろう・・・。私は、「二度とあのような戦争を起こさないよう、努力します」と墓石に向かって言っていました。

実は、今回の旅は、中日友好楼の養父母に会に寄せられた寄付を届けることを目的に計画したものでした。中日友好楼（養父母楼）で、すでに80歳、90歳になられる養父母の方たちにお会いしました。皆さんは、金銭的な援助よりも、子どもたちが会いに来てくれることがいちばんうれしいと言っておられました。戦後の極貧生活の中で、侵略国の子を拾って育ててくれた養父母の方たち。日本人孤児たちはこの方たちのお陰で、遠い異国で命を落とさずに済んだのです。孤児を育て終えた後、子どもの将来の生活のためにと子どもの祖国への帰国を涙を呑んで見送り、帰国後の日本人孤児たちの生活苦が聞こえるたびに、今も心を痛めている養父母たち。その姿に頭が下がりました。日本政府はこの方たちに何をしたのでしょうか。

中日友好楼にお住まいの養父母の方々

養父母、その家族と共に

長春の養父母楼訪問を終え、ハルビンに向かう列車のなか、ハルビンにいる姉の誕生日を祝いに行くという80歳の女性と席を隣り合わせました。しばらく話をした後、“私は子どものころ、学校で日本語を習いました。”「ニーハオはコンニチハですね」ときれいな発音の日本語で言われたときは、びっくりしました。「お上手ですね」と言ってしまったすぐあとで、日本の侵略時代に習った日本語だったのだと思いました。吉林大学を卒業し、法学部の教授を退官したというその女性は、最後まで私たちに対してとても丁寧な態度で接してくださいました。

養父母楼のある長春に到着した日の夕方、中国で2番目に広いという「文化広場」を地元の方に案内していただきました（一番広いのは北京の「人民広場」だそうです）。広場の周辺には日本軍が造った、大楼の上に瓦屋根の家をのせたような建物がまだ残っていました。その「文化広場」に、二胡やチェロ、その他の弦楽器で合奏を楽しんでいる老人たちがいました。わたしが見たことのない楽器について尋ねると、大阮（ダールェン）という楽器で、ギターなど、弦楽器の原形だと教えてくれました。

暫くの後、文化広場を後にしようと、再び彼らの前を通り過ぎようとしたとき、私たちに手を振り、何やらひそひそと話していると思うと、老人たちは「日本の友達のために」といって日本の曲を演奏してくれました。日本軍が建てていった建物に囲まれた文化広場で演奏された「北国の春」を私は忘れることができません。

文化広場 周囲には日本軍の造った建物が見える

文化広場の塔

大阮（ダールェン）を弾く老人と

周恩来首相は、「憎むべきは一部の軍国主義者であって、大半を占める日本国民は、我々中国人民と同じ軍国主義の犠牲者である」と言いました。鈴木会長は「敵国」に侵略者の一員として残され、その言のお陰で救われたと言っていました。また、今回訪れた方正県日本人公墓も周首相の許可を得て建てられたとのことです。その大らかさに敬服します。

しかし近年、日本の教科書問題、靖国問題をきっかけにその方針も変わりつつあります。中国の教育も、そして日本の教育も変わってきました。今回の旅行の最終日に訪れた瀋陽の９・18歴史博物館には、「歴史を鏡として平和を期望し、日本軍国主義の復活を警醒する」という文言の展示がありました。

瀋陽の９・18歴史博物館の前で

９・18歴史博物館内の中国養父母感謝の碑

戦争の記憶は年月と共に薄れていきます。事実も改ざんされていきます。私たちに課せられているのは事実を正しく伝えること。権力にだまされないこと、利用されないこと。命の大事さを自らが感じて伝え継ぐこと。戦争への動きを阻止すること。事実を見る目を持つこと。そのために勉強を怠らないこと。そしてその輪を広げること・・・。

日本人公墓の前で言った「二度とあのような戦争を起こさないよう、努力します」という言葉に、私はこのような思いをこめたかったのだと、今思っています。

＊　方正県日本人公墓訪問の計画に際して、方正友好交流の会の大類善啓様、奥村正雄様に大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

風化させてはならない歴史事実

―方正日本人公墓と人々の心―

高橋　健男

高速道路の高架をくぐり一面の水田の中の道路を左手に進むと、小高い松林の丘があり、その麓に広がる「中日友好園林」にたどり着く。その中に中国人が日本人のために建てた唯一の公の墓がある。一番奥まったところに「方正地区日本人公墓」「麻山地区日本人公墓」の墓碑が並ぶ。墓碑の後ろ手に、方正の凍土に眠った日本人満州開拓民約4,500体の遺骨が、そして麻山で集団自決した日本人満州開拓民400余体の遺骨を納めた円形墳墓がある。その墓碑から右手に20メートルほど歩を進めると、孤児となった開拓民の子供たちを養育してくれた「中国養父母公墓」がある。

「方正を訪れる日本人はそのほとんどが開拓団関係者」といわれる。戦後60年を越した今は、訪れる関係者は高齢に達する。だが、毎年200名、300名の参拝者がある。最近の慰霊訪中団には、その中に若者たち、そして私のような一般者が加わるようになってきている。私たちが慰霊訪問したのは2006年7月25日、方正県人民政府の係官の話では、今年のそのときまでに4訪問団、計100人がこの地を訪れたという。

慰霊のことばを述べる長田末作さん

2006年の私たち慰霊訪中団は7名の小さな「新潟県殉難者慰霊団」である。団長は新潟県初（昭和15年、第3次）の満蒙青少年開拓義勇軍の一員として勃利訓練所で3年間過ごし、その後旧東安省蜜山県興凱村勤農屯に入植した長田末作さん（82歳）。その地は旧ソ満国境の湖・興凱湖の北湖畔にあり、新潟勤農屯は周辺にいくつも入植していた開拓団のひとつであった。

長田末作さんは過去に新潟県開拓自興会第5代会長を務め、昭和57年に会を閉じた後は新潟県満州開拓民殉難者慰霊祭世話人会の代表を務める。慰霊訪中に出向くこと6回、今回は7回目となる。毎回ほぼ同じ行程で、方正、蜜山、勃利、佐渡開拓団跡、宝清、佳木斯などの訪問を繰り返し、現地を知り尽くした人である。

私は長田さんとは2005年2月に知己を得た。長田さんの義勇隊隊長さんが私の隣村の出であったこと、その佐藤数衛隊長の奥さんは地元の見附市（旧南蒲原郡新潟村）立新潟中学校の教師で、当時棟続きの新潟小学校で教師をしていた私の父と親しく、佐藤家のことを私もよく存じ上げて

いた。そんな関係で、佐藤隊長の33回忌法要に見附市においでになったときから何回かお会いすることが続き、満州開拓団、青少年義勇隊に関するお話をうかがうことができたのであった。

お話をうかがううちに私はいつしか満州開拓団関係のことにのめりこんで行った。新潟平野のど真ん中の農村である私の集落からも５家族が渡満していたし、長田さんはじめ多くの関係者に出会って体験談を聞くことができた。とりわけ、「満州開拓民殉難者のことを後世に伝えなければならない」「風化させてはならない」という長田さんの気持ちを素直に受け止めることができた。その長田さんが旧満州の現地訪問のたびに、必ず最初に謝罪から挨拶をすることも理解できたし、さらには現地中国人との信頼関係を築き交流を重ねていくことの大切さを語るその姿には感銘すら覚えた。

国境の湖、興凱湖に立つ筆者

戦後生まれの私はほとんど何も知らないで過ごしてきていた。長田さんとの出会いに触発されて、それまで関心を持って調べてきた日中関係の歴史から一挙に旧満州のこと、満州開拓団のことを調べることにシフトした。長田さんの思いに応えることができたかどうかは定かではないが、2006年4月、調査や現地訪問から得たことをまとめ『赤い夕陽の満州にて』と題して拙著を公刊した。

2005年当初、長田さんは私に是非方正訪問に同行するよう要望された。だが、そのときはまだ現役の教員であったが故に、休暇を取れなかった。だから、短期間の北満・北安市近辺の開拓地（五福堂、西火犁開拓団）の現地慰霊に参加した。定年退職した今年は7月上旬に南満・錦州錦盤市の刈谷田郷開拓団跡地を訪問し、下旬に方正から東満への開拓団殉難地を慰霊訪問した。

今回の訪問地はハルビン市方正県（人民政府表敬訪問、中日友好園林）、七台河市（人民政府表敬訪問、佐渡開拓団跡）、宝清（宝清街、宝光寺）、蜜山（旧東安駅、当壁鎮勤農村役場・勤農小学校、興凱湖、国境蜜山口）、そしてハルビンである。全行程は2,000キロに及んだ。

国境蜜山口

それらの地は長田団長がかつて過ごした勃利と勤農屯、勃利訓練所時代に交流のあった佐渡開拓団、新潟清和開拓団の殉難地である宝清などであった。佐渡開拓団跡は特定が難しい。七台河市人民政府担当官の案内で本部後近くという地に案内してもらった。トウモロコシ畑脇で慰霊法要を行った。

また、今回の旅では、長田団長が永年交流を持っている勤農村役場の人たちや勤農小学校の校長・子供たちとの交流も大切な目的であった。それぞれ楽しい時間を過ごした。私にとっては、日本敗戦後の開拓団が遭遇した事件（佐渡開拓団跡事件、宝清事件、東安駅爆発事件）や方正に

集結した各開拓団（主に長野県）などに思いをいたしながら、その現地を確かめ、その地に立ってみるという個人的な目的もあった。

公墓に至る参道

さて、方正日本人公墓、中日友好園林の今について少し報告する。公墓に向かう参道周辺並びに園林の管理・整備はすばらしい状態である。訪問時には入り口門から長野県建立の「日中友好記念碑」前の階段までの6、7メートル四方の土の部分にタイルを敷き詰める工事が行われていた。今後、入り口までの取り付け道路以外は、雨天でもぬかるみを踏むことなく慰霊に出かけることができる。

その整備と平行して入り口右手に中日友好園林の由来を記すという石板が設置されていた。碑文はまだなかったが、今年中に刻み込まれるのではないか。この碑文とともに記念館内部に関しても、まだまだ由来説明や展示物の充実、陳列棚の増設や整備がなされてもよいのではないかと思われた。

記念館内部、慰霊者の記念物多数

そのためには資金と労力が必要となる。計画・設計・実施は方正県人民政府にゆだねられるが、開拓団関係者・慰霊訪問者の寄進も必要であろう。私たち慰霊訪中団も新潟県有志の寄付を、各種修理のためにと贈呈した。

「方正友好交流の会」の前身、「方正地区支援交流の会」の石井貫一会長が「日本政府が万難を排してやらなきゃならんことを方正の人々に押し付けてしまった。方正の慰霊こそが私の“靖国”だよ」と話されていたことを思い起こす。「方正友好交流の会」はその遺志を引き継ぎ、各種の活動推進のために再編された。目的に「公墓の周知を図る」ことも掲げる。私もそのための一助として活動したい。「中国養父母公墓」の存在周知も含めて。

中国養父母公墓

旧満州二題

寺沢秀文（本会理事　長野県飯田市）

１．葫蘆島での６０周年記念式典に参加して

去る６月２５日、中国・遼寧省の葫蘆島市にて中国側主催による日本人居留民送還事業６０周年記念事業式典が開催され、日本側からも日中友好協会（全国本部）の代表団（団長・村山富市元首相)、信州葫蘆島の会の代表団（団長・穂刈甲子男同会会長）など、全国各地から約１８０人が参加した。終戦の冬を多くの犠牲者を出しながら旧満州各地で越冬した日本人居留民は、翌昭和２１年春から引き揚げが始まり、特にその中心となった葫蘆島からは約１０５万人の日本人が引き揚げたとされている。私事ながら元開拓団員であった私の母もこの葫蘆島からの引き揚げであり、母いわく「通過しただけで葫蘆島の記憶はほとんどない」とのことで、高齢の母に代わり私が参加させて頂くことにし、飯田日中友好協会の河原進会長を団長とする１５名の飯田地区代表団の一員として参加した次第であった。飯田周辺は戦前・中、全国で最も多くの開拓団を送出した地域柄だけに、飯田日中の団にも７名の葫蘆島からの引揚者に参加して頂いた。

葫蘆島での式典では、中国側からも唐家旋国務委員 (前外相）等を始めとした中央政府要人も多数参加し、地方紙のみならず中央紙などの中国側報道陣も多数参加する等、式典に対する中国側の力の入れようはかなりのものであった。その一方で、かつて日本人居留民が出港した葫蘆島港自体は現在は軍港のために日本側参加者は一瞥すら出来ず、また送還記念碑の裏側の碑文は何故か全て塗りつぶされている等、日本とは体制の異なる中国の一端を垣間見る機会ともなった。式典での中国要人挨拶の中で「侵略者であった日本人を送還したことにより中国人の寛大さを世界中に知らしめた」と自画自賛の繰り返しには国民性の違いを痛感したが、いずれにしても多くの日本人がこの地から引き揚げたことは史実であり、その際には中国の皆さんに多大なるお世話になったことに対しては衷心より厚く御礼申し上げるところである。日本側参加者の中には、「ここが私の戦後の原点」という感慨を抱く方も少なくなかったが、その一方で葫蘆島での今回の式典の話を聞いても「葫蘆島は単なる通過点。旧開拓地や苦しかった越冬地の収容所等での生活に対する思いは強いが、葫蘆島そのものに対する感慨は特にはない」と不参加の引揚者の方も少なくなかった。旧開拓団員の引揚者の多くがこの葫蘆島からの引き揚げであるに拘わらず、とにかく生きて引き揚げるのに必死で、この地での滞在時間も少なく、葫蘆島自体のことはほとんど記憶に残っていないというのも無理からぬところである。また、旧開拓団員のうち葫蘆島から帰った者の大半は女性、老人、子供であった。開拓団の壮・青年男子はそのほとんどが根こそぎ動員等により召集、さらにはシベリアに抑留され、葫蘆島から帰国することも無かった。私の父も３年間のシベリア抑留後、ナホトカから舞鶴へと引き揚げている。終戦前後混乱期の旧満州における様々な出来事については６０年経っても未だに解明されずにいることも少なくない。発展しつつある葫蘆島市の街並みを眺めながら、６０年前の引揚者たちの労苦に思いを馳せた次第であった。

２．満蒙開拓記念館(仮称)建設構想への取り組みについて

葫蘆島での式典から戻った３週間後の７月１５日、長野県飯田市で飯田日中友好協会の定期大会が開催され、ここで「満蒙開拓記念館（仮称）の建設推進」に取り組む事業が満場一致で採択された。全国から約２７万人が渡満し、多くの犠牲者を出したにも拘わらず、この満蒙開拓だけに特化した資料館、記念館は全国どこにもまだ建設されていない。関連類似施設としては茨城県の内原（現水戸市）に「満蒙開拓青少年義勇軍記念館」、シベリア等から６０万人が引き揚げた舞鶴市に「舞鶴引揚記念館」がある程度である。この多くの犠牲者（日中双方において）を出した満蒙開拓の史実を記録、保存、研究し、戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継いでいくための拠点として、何としても満蒙開拓記念館の建設をと取り組みが決まったものである。

この事業への取り組みを採択した飯田日中友好協会の活動エリアである長野県南端の飯田・下伊那地方は、前記通り全国で最も多くの満蒙開拓団を送出した地域であり、戦後も一貫して、残留孤児等の帰国支援、満蒙開拓の語り継ぎ事業等に地域をあげて取り組んできた経過がある。この地域性を鑑み、満蒙開拓資料館をこの飯田・下伊那の地にという構想は以前からあったが、ここに来て「この機会を逃したらもう永遠に無理」とようやく気運が盛り上がり取り組みが実現したものである。本来ならば、国策として送り出された満蒙開拓だけに、このような記念館等は国立あるいは県立なりでせめて一つぐらいは建設されて然るべきと思うも、行財政の厳しい中で期待は出来ず、まずは民間から活動を立ち上げ、行政をも巻き込んでいこうというものである。

現在、飯田日中友好協会が中心となり飯田市及び下伊那郡町村会等にも加わって頂いて準備会議を重ねているも、満蒙開拓という６０年以上の年月を経た特殊テーマの記念館構想だけに、その建設実現までの困難と共に、うまく建設できたとしても、その後の運営の如何こそが重点課題となることは言うまでもない。作っても閑古鳥ではお荷物となるばかりである。しかしながら、満蒙開拓という史実を語り継ぎ、平和をこの地から発信していくこと、「負の遺産」を如何に「正の遺産」に置き換えていくかの英知がこの飯田･下伊那の地に問われている。この地から全国に、海外にと平和を発信する拠点とするためにもこの記念館建設を是非とも実現させたく、全国の皆さんからの御支援をお願い申し上げるところである。私自身も戦後生まれながら、元開拓団員の子という縁から、「幻の国・満州」を歴史の彼方に消し去ることなく、そこに生きた人々、そこで亡くなった人々の証しを受け継ぎ、平和の礎とすることにより「正の遺産」として引き継ぐべく、これからも微力を傾けていきたいと願っている次第である。

「満州」／「引揚げ」の記憶をたどって

―泰阜村・方正・コロ島等を点にして―

南　誠（本会理事　京都大学大学院生）

かつては、満洲開拓団の跡地を訪れた日本人ジャーナリストが書いた次のような文章を読んだことがある。現地の子供を見ながら“この子達はいつか、満洲のことについて勉強するようになるのであろう”、と。私はまるでそれに導かれたかのように、修士課程に入った2001年から満洲について勉強するようになった。もちろん、当時の指導教官小林英夫教授のご教示に負うところが大きかったことは言うまでもない。その後、私は必然的に、自分が生まれ育った中川開拓団の跡地およびその周辺の開拓団について考えるようになり、泰阜村（大八浪開拓団）を何度も訪れ、調査を行った。また、泰阜村を通して、方正の存在の大きさを知った。今回はまさしく、このような点と点をつなげるための旅であった。

6月20日、関西空港から大連へ出発した。大連では間が空いたので海辺に行ってみた。アカシアの大連といった書物を思い出しながら、遠くを眺めていた。静けさのあまり、時間が過ぎていくのさえ感じられなかった。しかし、集団引揚げが開始される1946年からは、もう60年の歳月が過ぎていた。今回の中国に来た目的のひとつは25日に開催される引揚げ60周年式典に参加することであった。その前にはハルビン経由で方正の日本人公墓にも行ってきた。22日の朝にはハルビンに着いて、そのまま方正へ向かった。方正には一泊して、翌晩にハルビン駅からコロ島市へ向かった。コロ島市に着いたのは２４日の朝だった。

初めて訪れるコロ島市。まず、式典会場の近くでホテルを探して、チェックインした。朝食は近くの屋台で中国の定番朝食―油条（揚げパン）と豆乳―を食べた。それからはコロ島市内をふらふらした。市内の建物などを見ても、決して際立つような特徴は見当たらない。町中の人たちが平和に暮らしているのを見て、60年前に100万人強の日本人難民がここに集まってきて日本へ引揚げるのを誰が想像できようか。その引揚げの状況およびその後も中国に「残留」した人たちの生活がどうだったのかは、いまだに明らかにされていない部分が多い。これを明らかにするのが私の研究課題のひとつでもある。今回の式典を通して、何かの手係りが得られることを私は期待していた。

式典には内外から政府関係者のみならず、民間からも多くの人が参加していた。引揚げ60周年を記念することが目的であることは言うまでもないが、その背景には目下の「政冷経熱」の日中関係の改善を狙っていることは想像するに難しくない。確かに、日中間の歴史認識をめぐる論争において、「戦争」期間のことが大いに取り上げられるが、その後についてはしばしば軽視されがちである。そういう意味において、今回の式典は大きな意義を持っているといえよう。

しかし、式典に参加される皆さんは各々の感情を抱えていたようだ。かつての満洲での

生活、逃避行、引揚げ、引揚げ後の生活などを思い出しながら……。私も祖母とその姉を除いた親族がコロ島市にやってくるのを想像しながら、式典に参加していた。また、祖母の弟が息子の前で初めて、満洲や引揚げを話して、その息子が大変驚いたのを思い出した。このように、今となっては多くの人が満洲や引揚げのことをあまり語りたがらない（あるいは語れないと言ったほうが適切かもしれない）。しかし、このような個々の体験こそが日中関係を考えていく上で、もうひとつのパースペクティブを与えてくれる。

今回の式典を通して、多くの人たちと知り合うことができた。皆さんはそれぞれ異なる体験を持っているが、引揚げに関しては共通した気持ちを持っているようでもあった。式典が終わった翌日の北京行きの列車の中では、三重県から一人でやってきた老人と出会った。ゆっくり、話を聞くこともできた。60 年が過ぎたとはいえ、老人のもう一回この地を訪れたいという思いはその間、ずっと変わらなかったようだ。それが今回の式典をきっかけに達成された。老人は気持ちを抑えられずに、涙ながらそれを語ってくれた。

今回もそうであったように、泰阜村、方正あるいはほかの地を訪れるたびに、満洲をめぐる問題意識が深められていく。今後は満洲にかかわる人々の記憶を真摯的に聞きながら、それぞれの問題意識について明らかにしていきたい。そのために、泰阜村、方正とコロ島などの点と点をつなげながら、その全体像について考えていきたい。

[人民日报]（海外版） 2006年6月8日付

“日本人公墓”所在的黑龙江省方正县，是民族宽容的“活化石”，特殊的历史塑造了特殊的侨乡

民族宽容“奠基”方正侨乡

■ 颜秉光 崔峰

两座公墓的“历史对称”

在“日本人公墓”的旁边，是一座“中国养父母公墓”。

二者产生一种独特的“历史对称”：一边是由战争受害国不计前嫌为战争发动国遇难侨民修建的公墓。另一边则是战争发动国侨民后代为纪念战争受害国人民救命之恩修建的墓地。

据方正县政府外事侨务办公室主任王伟新介绍，“当年除了死亡的5000多人外，还有4500多名日本妇女和儿童滞留在方正县，中国百姓见他们十分可怜，就收养了这些儿童。一部分日本妇女也与当地百姓组成家庭。”

远藤勇就是这些孩子中的一个。幼年随全家由日本来到中国，远藤勇的父亲在日本“开拓团”里被日军征兵入伍。“开拓团”撤离时，祖父母、母亲及姑姑都死在途中，当时年仅6岁的远藤勇成了遗留在中国众多日本孤儿中的一个。1946年春，在难民收容所里生命垂危的他，被居住在方正县庆丰村的中国农民刘振权、吕桂云夫妇收养，并起了个中国名字叫刘长河。

“中国养父母公墓”

为了抚养远藤勇，两位普通的中国农民倾注了全部心血。为了供他上学读书，夫妇俩早起晚归，辛勤劳作，节衣缩食，一直供他读完了大学。

大学毕业后，远藤勇被分配到哈尔滨市第19中学任教。1974年，远藤勇偕妻子和孩子回到日本定居。

远藤勇很难忘记这段历史，为了报答中国养父母对他的救命养育大恩，他捐资于1995年在日本人公墓旁边建成了“中国养父母公墓”。该墓地占地600多平方米，墓身呈圆形，墓穴内分5层放置骨灰盒。他的养父母去世后，遗骸都安放此处。

“养育之恩，永世不忘”，8个钢筋焊接的大字，在“中国养父母公墓”正门两侧显得非常醒目。中日邦交正常化后，日本遗属、遗孤及他们的第二代陆续开始回国。由于大多数中国养父母都年事已高，很难随子女到日本生活，方正县的归国遗孤们常常要面对人生中第二次“骨肉分离”——这次是与他们的“中国父母”。

佐佐木邦雄也有着和远藤勇类似的身世，回到日本后，正当他要把养母接到日本安享晚年时，养母却突然得病去世了。佐佐木邦雄跪倒在养父母的墓前泣不成声：“养父母对我恩重如山，我却没有报答他们，我对不起养父母啊！”

亲缘血缘铸造“新侨乡”

方正人民“以德报怨”的博大胸襟，建立了特定历史背景下中日组合的特殊家庭，并不断繁衍生息，形成了方正与日本的亲缘、血缘关系。

30多年来，一批又一批与日本有亲缘、血缘关系的方正人陆续定居和侨居日本，方正县逐渐演变成黑龙江省华侨华人和归侨侨眷人数最多的县。据方正县外事侨务办公室副主任李宝元介绍，在有着23万人口的方正县，就有86270位华侨及侨眷，占全县人口的47.14%。

方正县与日本的关系带有明显的时代烙印，改革开放以后，这种独特性已不仅仅通过亲缘纽带来体现。

毕忠庆在日本打工3年，最终带着“第一桶金”回到方正县，投资百万元人民币办起了龙湖公园。他的父亲是地地道道的中国农民，母亲是日本人，在方正像他这样的人被称作“二代”，是中日混血儿。现在，他的儿子和儿媳还在日本，工作生活都很如意，比他这一代更能融入日本社会。

在方正县，有一个很独特的现象，就是这里的日语学校很多。由于与日本特定的亲缘和血缘关系，在方正县不到4人中就有1人有日本亲属。在当地人的餐桌上，可以见到黑龙江特色的德莫利炖活鱼与日本风格的寿司、生鱼片时常搭配在一起。

中日民间交流的一扇窗口

目前，从方正县回到日本定居或取得日本国籍的人数已突破了4万人。

王伟新说，这些人到达日本后，向当地人介绍了公墓，有的还亲自带领日本人来这里参观。这也使得坐落在方正县境内的“日本人公墓”，成了中日民间交流的一个“平台”。方正县也成了两国民间交流的一扇窗口。

中日邦交正常化以来，每年不光有日本政府和民间人士来方正访问，方正县政府自1984年开始，也先后派出16个代表团赴日考察访问。1990年方正县与日本山形县大石田町建立了友好县町关系，1999年又与日本长野县泰阜村建立了友好县村关系。

1981年日本“农民水稻王”藤原长作来方正传播“水稻寒地旱育稀植技术”，此项技术经方正县传遍中国各地。1996年经日本友人的努力，日本政府无偿援助的水稻耕作机械化和畜产振兴项目得以在方正顺利实施。此外，日本友好人士和团体先后向当地捐赠农业机械、医疗设备、教学仪器等物资和资金等折合人民币700多万元。

近年来，方正县针对特殊的县情，充分挖掘侨力资源，扶持发展侨务经济。该县已利用侨资总额达1.1亿元，侨资侨属企业38家。方正县企业生产加工的山野菜、方通大酱、江川白酒、黏玉米棒等已远销日本。目前，哈尔滨市政府已将下辖的方正县发展“侨务经济”列入该市“十一五”规划。

残留孤児の郷・方正の『礎』となった民族の懐の深さ

「日本人公墓」のある黒龍江省方正県は、民族の寛大さが表れている
「生きた化石」、特殊な歴史によってつくられた特殊な華僑の郷だ

顔乗光　崔峰
『人民日報』海外版（翻訳）
2006年6月8日付

二つの公墓は「歴史の対称」

「日本人公墓」の傍らにもう一つの「中国養父母公墓」がある。

この二つの公墓の間が独特な「歴史の対称」のような雰囲気を醸しだしている。一つは戦争被害国が、戦争を仕掛けた相手の国の受難し在留した人々の為に建てたものであり、もう一つは戦争を仕掛けた国の在留した人々の子孫が、自分たちの命の恩人である戦争被害国の国民の為に建てたものである。

方正県政府外事僑務弁公室の主任王偉新の説明によると、当時5000人余が死亡、残りの4500人位の日本人女性と子供が方正県に留まっていた。その人たちの境遇を憐れんだ中国人たちが孤児たちを引き取り育てた。一部の日本人女性は現地の中国人に嫁いだ。

遠藤勇もその孤児の一人で、幼い時に家族とともに中国へ渡った。父は現地の日本の開拓団にいた時に徴兵された。開拓団が撤退するときに、祖父母、母と伯母が途中で亡くなり、当時6歳の遠藤勇は中国残留日本人孤児のひとりとなった。1946年春、難民収容所で彼は危篤の中、方正県慶豊村の劉振権（権は間違い、本当は全）と呂桂云農民夫婦に引き取られ、劉長河という中国名に改名され育てられた。

「中国養父母の公墓」

遠藤勇を育てるため、ごく普通の中国農民である養父母は、全心血を注いだ。学校に行かせるため、夫婦二人は朝から晩まで働き、切り詰めて質素な生活の中で彼を大学まで行かせた。

卒業後、遠藤勇はハルビン市の第19中学校に教師として配属され、1974年妻子と共に、日本に帰国して定住した。

しかし、遠藤勇はこの間の歴史が忘れられず、命を救い育ててくれた中国の養父母の恩義に報いるために1995年日本人公墓の傍らに、「中国養父母の公墓」を寄付し建設した。敷地面積は約600㎡余、丸い形にした墓の中は5層になっており、骨箱が納められている。彼の養父母も亡くなった後、ここへ納骨された。

“養育之恩、 永世不忘”（育ててくれた恩は、永代まで忘れず）と目を引くように、「中国人養父母公墓」の正門両側に鉄筋で作られた8つの文字が掲げられていた。日中国交正常化以後、日本の遺族と孤児並びに第二世代が続々帰国し始めた。多くの中国の養父母が高齢のため、子供とともに来日して生活するのは、非常に難しい。それゆえ、方正県の帰国孤児たちが人生の中で2回目の肉親との別れを耐えなければならない――それは、中国の養父母との別れである。

佐々木邦夫の境遇も遠藤勇と非常に似ている。来日後、養母を日本へ迎えようとした時に、養

母が病気で突然にこの世を去った。佐々木邦夫は養父母の墓の前で、養父母の恩は山のように大きかったが、私は報いることができず、申し訳ないと泣きながら詫びていた。

親しい縁と血縁で新しい華僑の郷が出来上がる

「徳をもって、怨みに報いる」という方正県民の豊かで大らかな心が、特殊な歴史背景の下、日中で組み合わさった特殊な家庭が作られた。このような家庭は営々と繁栄し、方正と日本の親戚関係が形成された。

30年余年来、日本と親戚のある多くの方正人が、続々と日本へ定住することにより、方正県は徐々に黒龍江省の中でも、華僑華人と中国へ帰国した華僑と親族が多い県になった。方正県外事弁公室副主任李宝元によると、方正県23万人の人口のうち、86,270人が華僑とその家族で、全県人口の47.14%を占めている。

方正県と日本の関係は時代の烙印を明らかに記された。改革開放後も親縁という結びだけではなく色々な形で現れている。

毘忠慶が日本で3年間を働き、大金を持って方正県に帰国し、百万人民元を投資して、龍湖公園を建設した。彼の父は正真正銘の中国の農民で、母は日本人、方正ではこのような日本と中国の混血児を、「二世」と呼んでいる。現在、彼の息子と嫁がまた日本におり、生活と仕事に満足しており、彼の世代よりも日本社会に溶け込んでいる。

方正県には独特な現象が起きている。日本語学校が非常に多い。日本と特殊な親縁と血縁関係により、方正県には4人に1人は日本に親族がいる。現地の食卓には、黒龍江省の徳莫利煮魚と日本の寿司、刺身は一緒に並べられている。

日中民間交流の窓口

目下、方正県から日本へ渡った定住者と日本国籍を取得した人は4万人を突破した。

王偉新によると、彼らは日本に行って、現地の人に公墓について紹介し、また日本人を案内してこちらへ参拝させていた。方正県内の日本人公墓が日中民間交流のプラットフォームになって、方正県も両国民間交流の窓口にもなった。

日中国交正常化以来、日本政府と民間が方正を訪問するだけではなく、1984年から訪問視察を目的とした代表団は16組を日本に派遣した。1990年、方正県と日本の山形県大石田町は友好都市となり、1999年には日本の長野県泰阜村と友好村となった。

1981年、日本農業の水稲王といわれて名高い藤原長作は、方正へ「寒地水稲稀植技術」を伝授しそこから全国へ広まった。1996年、日本の友人の努力により、日本政府から稲の耕作の機械化と畜産振興プロジェクトなどの無償の技術援助を受け、方正で順調に実施された。さらに、日本の友好関係者と団体は、農業機械、医療設備、教育器械などの物質並びに資金を合わせて計700万人民元余りを寄贈した。

近年、方正県は県の特殊な事情に対して、華僑の力と資源を十分に発掘し、華僑経済の発展を促進させた。当県が既に運用した華僑資金の総額は1.1億人民元に達した。県内には華僑資本と親族企業が38社ある。方正県で生産加工された山菜、方通味噌、江川白酒、トウモロコシは日本へ輸出した。目下、ハルビン市政府は管轄下である方正県の「華僑経済計画」を、当市の第11回五ヵ年発展計画に組み入れた。

:: 新·网 – 国·先··· ::

www.news.cn 新华网 NEWS www.xinhuanet.com

首页 新闻中心 国际扫描 法治 论坛 图片 财经 汽车 IT 文化 旅游 短信
高层动态 新华视点 焦点网谈 军事 网评 专题 证券 房产 科技 音乐 会展 影团
政府在线 满 满 会 华人华侨 传媒 访谈 资料 电商 美食 时间 游戏 职场 WAP
新华视频 人事任免 振兴东北 体育 教育 校园 收藏 健康 读书 直播 RSS 手机

新华报刊

Haier 海尔笔记本电脑 时尚生活 成就自我 tebook

硅谷动力组网大赛
教育新闻网开通
韩国现代并购英昌乐

国际先驱导报 INTERNATIONAL HERALD LEADER
推动中国前进的媒体动力

国际先驱导报首页

先驱要闻 政治言论 经济财富 社会文化 科技教育 精彩推荐
报纸订阅 — 免费试读 — 过刊检索 — 广告服务 — 关于我们 — 联系我们

日本侨乡的前世今生

新华网 （ 2006-06-06 10:25:40 ） 来源： 国际先驱导报

日本人公墓所在的方正县是民族宽容的“活化石”，特殊的历史塑造了特殊的侨乡

国际先驱导报驻哈尔滨记者颜秉光、崔峰报道 在“日本人公墓”的旁边，是一座“中国养父母公墓”。

二者产生一种独特的“历史对称”：一边是由战争受害国不计前嫌为战争发动国遇难侨民修建的公墓。另一边则是战争发动国侨民后代为纪念战争受害国人民救命之恩修建的墓地。

“当年除了死亡的5000多人外，还有4500多名日本妇女和儿童滞留在方正县，中国百姓见她们十分可怜，就收养了这些儿童。一部分日本妇女也与当地百姓组成家庭。”方正县政府外事侨务办公室主任王伟新告诉《国际先驱导报》。

民族宽容为侨乡“奠基”

远藤勇就是这些孩子中的一个。幼年随全家由日本来到中国，远藤勇的父亲在日本“开拓团”里被日军征兵入伍。“开拓团”撤离时，祖父母、母亲及姑姑都死在途中，当时年仅6岁的远藤勇成了遗留在中国众多日本孤儿中的一个。1946年春，在难民收容所里生命垂危的他，被居住在方正县庆丰村的中国农民刘振权、吕桂云夫妇收养，并起了个中国名字叫刘长河。

为了抚养远藤勇，两位普通的中国农民倾注了全部心血。为了供他上学读书，夫妇俩早起晚归，辛勤劳作，节衣缩食，一直供他读完了大学。

大学毕业后，远藤勇被分配到哈尔滨市第19中学任教。1974年，远藤勇偕妻子和孩子回到日本定居。

远藤勇很难忘记这段历史，为了报答中国养父母对他的救命养育大恩，他捐资于1995年在日本人公墓旁边建成了“中国养父母公墓”。该墓地占地600多平方米，墓身呈圆形，墓穴内分5层放置骨灰盒。他的养父母去世后，遗骸都安放此处。

“养育之恩，永世不忘”8个钢筋焊接大字，在“中国养父母公墓”正门两侧显得非常醒目。中日邦交正常化后，日本遗属、遗孤及他们的第二代开始陆续回国。由于大多数中国养父母都年事已高，很难随子女到日本生活，方正县的归国遗孤们常常要面对人生中第二次“骨肉分离”——这次是与他们的“中国父母”。

佐佐木邦雄也有着和远藤勇类似的身世，回到日本后，正当他要把养母接到日本安享晚年时，养母却突然得病去世了。佐佐木邦雄跪倒在养父母的墓前泣不成声：“养父母对我恩重如山，我却没有报答他们，我对不起养父母啊！”

日本侨乡的当代史

精彩推荐：
* 敬请关注《中国策2006
* 美国华裔非法移民
* 中国“淘宝奇兵”出师日
* “俄罗斯年”启动
* 中日青年交流50周年
* “二二八”之痛
* 中国工程师在巴遇刺真
* 汉语热中的繁简之争
* 日本对华殖民教育调查
* 朝鲜寻找经济振兴之路
* 日搜查北京人头盖骨内
* 中东强人政治谢幕
* 蓝绿决战“百里侯”
* 2006年：日本对华公关
* 禽流感改变中国
* 台湾光复一甲子
>>更多

本专题所登载文章均
《国际先驱导报》提供给
华网的独家报道。其他媒
未经允许不得转载。

《国际先驱导报》4开
版，逢周五出版，国内外
行，全国各地邮局均可订
阅。
邮发代号：1-65
年定价：75元
零售价：1.50元
地址：北京宣武门西

徳をもって恨みに報いる義挙が日本を感動させる

国際先駆導報（翻訳）

中国が「日本人公墓」を建立したやり方は、日本人の一部の民衆と学者の賞賛と感動を呼んだ。

「この公墓は日本にもある程度の知名度があり、20世紀80年代から毎年約20団体以上の日本政府及び民間団体が方正に来訪して観光と墓参りを行った。90年代に入ると日本政府と民間の友好団体が公墓拡張のため、資金援助を行った。近年、毎年延べ30から40以上の日本人観光ツアーが来訪して見学を行い、最も人数が多かった団体は、1290人にのぼった」と方正県政府外事弁公室主任王偉新が「国際先駆導報」に語った。

元方正県外事弁公室副主任である陳福堂に深い印象を残したのは、日本の山形県からのある観光団体である。かつて日本の官房長官を務めていた経験のある国会議員が観光団体の顧問として公墓に墓参りを行い、公墓に高い評価をして、中国人の寛大さに感銘した。

「遅かった」建立援助

日本学術振興会特別研究員である京都大学の坂部晶子の『『満州』移民をめぐる寛容さの記憶――黒龍江省方正県の日本人公墓建立を通して」の報告によると、「日本人公墓見学団」は80年代から、日本の孤児家族、日本友好団体、日本各地の友好団体が参加者の主体である。

見学訪問以外、日本の各友好協会は「日本人公墓」の建立と管理に関して、日本国内でのＰＲに協力した。1994年7月、日本の埼玉県秩父、荒川日中友好協会副理事長の鈴木武雄氏を団長とする友好訪問団が、方正県を訪問するとともに、「日本人公墓」と周辺の道路調査を行った。帰国後、鈴木武雄氏は日本各地のテレビや新聞などのメディアを通して「日本人公墓」のＰＲを行い、公墓の修復、記念陳列館と周辺道路の修復建設などを呼びかけ，多大の貢献をした。日中友好公園の重要な構成部分である記念陳列館は、埼玉県日中友好協会と他の日中友好団体と有識者の共同出資によって建設された。日本軍の侵略犯罪史、中国の軍民の抗戦史と中日友好交流史などが、この日本式の建物の中に展示されている。

日中友好公園の記念碑の多くは、日中友好団体の支援によって建設され、その団体の中には仏教の立正佼成会などの宗教団体も含まれている。立正佼成会の会長は「日本人公墓」の事を知り、中国人の寛大さに感銘し、方正県に赴き墓参りと会費による方正県民への援助を決めた。立正佼成会は1987年8月に第1回「日中友好親善交流訪中団」を組織し、方正県を訪問して日本人公墓に墓参りを行った。1992 年、佼成会の寄付により公墓の照明用の電力問題を解決した。2002年8月15日、中日友好公演内で立正佼成会の寄付により「中日友好、世界平和塔」を建設し、日本の立正佼成会とハルビン市方正県人民政府は落成式を行った。

真相をもっと多くの日本人に知ってもらおう

中日友好公園の責任者である王偉新によると近年、日本からの見学者は右肩上がりである。多くの参加者が、日本軍国主義の犯罪と中国人の日本孤児扶養などのことを知り、この歴史を多くの日本人に知ってもらいたいと語った。

日本の「方正友好交流の会」は、その良い例である。会は1993年に設立され、2005年6月に再組織された。会の事務局長である大類善啓氏によると、この公墓の存在は、一部関係者以外には殆んど知られていないという。中国人が民族の憎しみを超えて公墓を建立し、これを維持管理している行動は、もっと多くの日本人に知ってもらい、維持管理の面で日本の協力を促進するとの趣旨で、「方正友好交流の会」を設立した。

いまの日中関係が冷え切った時期に、「方正」はもっと力を発揮しなければならないと、大類善啓氏は思っている。彼は一日本人として、「日本人公墓は我々に何を伝えているのか。」「日中国交回復以前の 1963 年、方正県は日本人公墓を建立した。正に包容力のある指導の結果である。1963 年は国交回復の 9 年前で、中国全土が、日本の侵略に対しての憎しみはまだ衰えていないなか、中国人は現地で斃れた日本人を日本軍国主義の犠牲者として考え、方正に埋葬した。3 年後の文化大革命の嵐が中国全土に吹き荒れ、外国文化と古い伝統と関係のある文物も全て破壊の目に遭っているなか、方正地域の『日本人公墓』は中国人によって手厚く保護された。日中関係がどのような時代にあっても、『日本人公墓』は友好を思い出す最適な「聖地」である、と言えるだろう。今後の日中関係を考える上でも、民族主義を超えた国際的な友好精神によって誕生した『日本人公墓』が、我々に大きな啓発を与えている」という。

それ以外でも、日本のメディアは方正日本人公墓について紹介していた。2002 年「朝日新聞」が連載した小田実の「アジア紀行」のなかで、公墓にも触れており、日本人は自分たちの過去を「忘れない」という意識を確立するように努力しなければならないと指摘した。

(注:『国際先駆導報』は新華社から知識人向けに毎週発行される中国の国際関係情報誌である。今回は 2006 年 6 月 6 日にインターネットで配信されたものを翻訳した)

怪物的な元気さを誇る韓慶愈さん

長年、日中友好運動の先頭に立って活動されている本会顧問の韓慶愈さんは今年で８０歳である。しかし通常考える年齢以上にとても元気で、頭の回転も衰えることはなく、また目配り、気配りもおさおさ怠りなく、しっかりしている。毎日仕事で接している者がいうのだから間違いはない。

つい最近も、理事長を務めている（社）日中科学技術文化センターが組織した「中国最新鉄道事情視察訪中団」に最高年齢で参加した。高山病の心配もあるチベット鉄道に乗って出かけたラサでも本当に元気だった。ラサでは、お互いに体の変調があればすぐ気がつくように、ホテルでは全員、ツインで泊まることにした。私は韓さんと二晩同室になったが、夜も東京にいる時と同じようにテレビのニュースを必ず見る。そして健やかに眠りに入る。朝も私以上に食が旺盛で、驚くというより唖然とするような怪物ぶりなのである。P３６には、拙い文章だが、韓さんの波乱に富んだ人生を紹介しているので、ぜひご一読いただければ幸いである。　　（大類善啓）

昨年６月の再編総会で挨拶する韓さん

ポタラ宮殿前での韓さん（今年９月ラサで）

『信濃毎日新聞』 2006年5月22日付

日本人公墓 知る旅へ

満州の歴史 若い世代に

方正友好交流の会が訪ねる、満州開拓団員らの遺骨を納めた「日本人公墓」＝2005年4月、中国黒竜江省方正県

中国黒竜江省方正県と交流する市民団体「方正友好交流の会」（事務局・東京）が六月、満州開拓団員らの遺骨を納めた現地の「日本人公墓」などを訪ねる「歴史検証の旅」に出掛ける。戦後六十年の節目の昨年、日本人公墓の存在を広めることなど目的に県内関係者も加わって活動を再開した交流の会にとって、再出発後初の訪中。今後の活動に弾みをつけると同時に、小泉純一郎首相の靖国神社参拝を巡り緊張が続く日中関係を、市民活動から改善していく一助にと願っている。

同会は、中国残留や満州開拓経験のない若い世代が中心となって再出発した。県内関係では、祖母が下伊那郡平谷村からだ。満州に渡った帰国三世の京大大学院生、南誠さん（30）と、県開拓自興会常任理事で、父が元開拓団員だった寺沢秀文さん（52）＝同郡松川町＝が理事に加わっている。

今回の訪中には、南さんのほか、東京や新潟などから千数人が参加する予定。日本人公墓の墓参や方正県政府への表敬訪問、現地の日本人学校関係者との交流などを通じて、満州の歴史を振り返るとともに現地の人たちと親交を深める計画をしている南さんは、現地では若い世代にも公墓の存在は知られているが、日本国内では存在を知る人は減っているとし、「公墓は、日中の歴史や友好を、別の視点から探る重要な存在になる」と指摘する。

方正では終戦後、ソ連侵攻などにより満州（中国東北部）の開拓地から逃避してきた開拓団員らが数多く、病気や飢えなどで命を落とした。方正県は、亡くなった人たちの遺骨を集め、日中国交正常化以前の一九六三年に日本人公墓を建立。中国政府公認の唯一の公墓とされ、同会は「中国側の深い愛情、友情のたまもの」と位置付けている。

中国帰国者などの研究

県内関係者参加の団体 来月訪中 交流も

訪中する同会参与の奥村正雄さん（75）＝千葉市＝は「まず、自分たちが現地を訪ねて公墓を見て、その存在を日本の若い世代に広めていくことが先決だ。政府の関係がぎくしゃくしている中で、歴史を確認し合い、市民の交流を深めてきたい」と意義を説明する。

一昨年九月、県開拓自興会が訪中した際には、反日感情の高まりを受けて公墓での慰霊行事が省政府の要請で中止された経緯があるが、南さんは最近の中国国内情勢などから「今回は友好的な交流ができるだろう」と話している。

にいがた 時評

命懸けの逃避行 歌忘れず

三波春夫と旧満州

終戦前後、満州開拓団を襲った悲劇の数々を取材していた私は、四年前の夏、新潟市東堀で染物屋を営業しておられた野口幸次郎さん(八四)を新潟市国際課の近藤淳一さんから紹介され、お話を聞く機会があったが、その中に三波春夫のことがでてきた。

「敗戦直後の旧満州・方正県の収容所で三波春夫と一緒だった。その後、彼はシベリアへ移送され、衛生兵だった私は重傷者の保護を命令され、方正の収容所にとどまっていた。だが事態が急迫し、地中に隠していた武器や麻薬などをやって中国軍の顔見知りを買収し、ハルピン行きの貨物列車に潜り込み、収容所を脱出した」

現在の中国黒竜江省、ハルピン市方正県は敗戦時、ソ連軍の侵攻(一九四五年八月九日)で慌ただしい逃亡を余儀なくされた北満各地の開拓団員(ほとんどが老幼婦女子)たちが、想像を絶する苦難の末にたどり着いた田舎町である。しかしここでも迫り来る寒さと飢えと疫病で同胞はばたばたと死んでいった。

それから六十一年、この町はいま日中関係逆流の時代に「方正こそ友好の原点」とする見方が広がりを見せている。それは六三年、まだ日中国交回復もなく中国には侵略者日本への憎悪が渦をまいていたこの時期に、敗戦時死んでいった同胞の遺骨を集めてくれ、ここに公墓を立ててくれたことによる。いまもって中国にある日本人の公墓はここだけだ。

◇

それにしても三波春夫はこの時期、どういう経緯でここ方正県にいたのだろうか。三波の生前、秘書として長年、父に付き添った長女・八島美夕起さんの証言である。

「方正でのことは、三波自身が著書『すべてをわが師として』の中でも書いていますし、取材や講演の時にはこの地名を出して話していました。三波は北満のウルクリ山を陣地としてソ連の参戦に直面したあと退却、四五年九月九日に敗戦を知ります。〈宮城へ向かって…〉と最後の捧げ銃をしたあと武装解除され、方正という部落へ歩いて向かいました」

三波の所属する日本軍がいたウルクリ(烏蘭古力)山は、黒竜江省佳木斯から松花江沿いにロシア国境へ向かったところにあり、旧日本軍が三層の頑丈なトーチカを築いてソ連軍と対時した山岳地帯である。

今年の五月、会田洋柏崎市長らも参加し柏崎市訪問団が、檞樹柏崎開拓団跡地や方正の日本人公墓を訪れた。一行には柏崎開拓団と隣接していた長野開拓団の記録を調べている長野県の「旧満州を調査記録する会」も同行したが、記録する会の方々はウルクリ山近くまで足を伸ばし一帯を管理する富錦市で、三波たちがソ連軍と対時したトーチカ群にまつわる中国側の資料を得て帰国した。その中にこんな下りがあった。

「一九四二年、日本帝国主義侵略者はこの山に大規模なトーチカ陣地を築くため、多くの中国人労働者を連行、工事が終わると軍事秘密を守るため二万人余を皆殺しにした。その中でただ一人馬運栄は首のつけ根に重傷を負いながら、死者の山の中から逃げ延びて村人に助けられ、唯一の生き証人となった」

◇

ところで三波の属した部隊は、ソ連軍が侵攻してきた四五年八月九日から敗戦を知った九月九日まで二十七日間、時には近くを通るソ連軍に気づかれぬよう息をひそめ、時には紛れ込んできた従軍慰安婦や避難する開拓団の婦女子をも従えながら方正へ向かったのだった。(『すべてをわが師として』)

三波がシベリア抑留のためハバロフスクへ移されたのが同年十月二十四日だから、方正に滞在したのは一カ月前後ということになる。この間に野口幸次郎さんは方正収容所で三波の浪曲を何度か聞いたというのだ。

「佳木斯の陸軍病院の衛生兵だった私はこのとき方正に残された十人の傷病兵の世話をしていました。ある日、浪花節のうまい男がいるが、患者の慰問にどうだという話になり、現れたのが当時南條文若という芸名の三波さんで『関の弥太っぺ』をやってもらったのを覚えています」

三波の帰国が四九年九月二十日、そして野口さんの帰国が五三年四月。方正で別れた後二人は五四年八月、新潟市公会堂で九年ぶりに再会した。三波は浪曲師から流行歌手に転身していた。楽屋を訪ねた野口さんに三波は「よく訪ねてきてくれたね。新潟の緑会(三波の後援会)の役員になってくださいよ」と言って手を握った、という。

それから時が流れた。三波は五年前に他界し、野口さんは昨年、軽い心筋梗塞で倒れ、いま横浜市の長女のもとで静養している。

奥村 正雄
(方正友好交流の会顧問)

拡散する着火点　山口 秀人

方正友好交流の会とODAの関わり

牧野文敬（方正友好交流の会 参与）

方正県に対する日本政府からのＯＤＡ実施については、次の４点を基本として１９９６年３月２５日、ハルピン市科学技術委員会主任と国際協力事業団専門家派遣事業部長との協定書署名調印によって実施された。

１　名称　　チーム派遣協力「水稲機械化と肉用牛生産振興」
２　期間　　１９９６年７月１日から３カ年間
３　場所　　ハルピン市方正県
４　目的　　方正県における水稲耕作機械化技術並びに肉用牛生産振興を図る

この３年間、具体的な協力としては、

イ　　日本の専門家による技術指導
ロ　　中国の専門家を迎えての技術研修
ハ　　水稲機械化・肉用牛生産にかかわる機械提供

という内容で実施された。そして１９９９年６月２５日、ハルピン市科学技術委員会による中国評価調査団長と国際協力事業団日本評価調査団長によって「日中合同評価報告書」を作製、５日後の６月３０日、このプロジェクト技術協力は終了した。

では方正友好交流の会（当時の名称は「方正地区支援交流の会」）はこの技術協力にどう関わったのか。実はこのプランの発想から根回し、仲介斡旋まで、最重要な役割を果たしたのが当会の前会長・故石井貫一先生である。石井先生は日本政府による開発援助ＯＤＡの仕組みを知り尽くしており、これを方正県に適用しうる計画を綿密に立てた上で斡旋工作を進め、これを成功させたのである。ＯＤＡ実施にあたっては、受益国である中国政府（国家科学技術委員会日本処）からの要請に基づいて実施される、というのが基本。したがって方正側では人民政府科学技術委員会がハルピン市科学技術委員会および黒竜江省政府科学技術委員会を通して要請する、という手順を踏んだ。これに対して中央政府が各省から上がってくる請願を審査し、各分野ごとの優先順位をつけて日本側に送られる、という手順になる。「方正は敗戦時、多くの日本人同胞を援助してくれた」とか「国交がまだ回復していない時期なのに日本人公墓を建ててくれた」などの理由でこの申請が通るはずはない。胸の中ではその思いを人一倍熱く抱きながら、このシビアな申請を整えさせ、実施を実現させた石井先生の慧眼とクールな実務感覚に、いまさらながら敬服するほかない。

あれから７年、中国は大きく変わり、ＯＤＡとの関係も変わろうとしている。この流れの中で私たち「方正地区支援交流の会」も新しく「方正友好交流の会」へと変わり、現在、会とＯＤＡとの直接的な関わりはない。日中逆流の時代に抗し、方正公墓の存在をひとりでも多くの人に知らせてゆく…これが新しい会の、新しい使命と考えている。

天を恨み　地を呪いました

――中国・日本人公墓のうめき――

２００６・１２・３

幕張９条の会　発足記念講談台本

奥村正雄（方正友好交流の会 参与）

■ 置き去りにされた32万人

今からお話いたしますのは６１年前、実際に起こったお話でございますが、それよりさらに13年さかのぼります１９３２年３月１日、中国の東北３省、今で申します黒竜江省、吉林省、遼寧省の３つを合わせたところに「満州国」という国が誕生いたしました。国とは申しましても日本が朝鮮を植民地としたあと、ここに中国の辛亥革命で皇帝の地位を追われたラストエンペラー・溥儀（ふぎ）さんを連れてきて皇帝に据えまして、13年間、日本が思うままに操った、いわば幻の国でございます。

ここに、泣く子も黙る関東軍が北のソ連をにらんで満州全土に展開していたわけでございますが、当時の日本政府はこの満州に20年間に100万所帯、人数にして500万人の開拓団を送り込む計画を進めたのでございます。折から経済不況で貧しい全国の農村から、次々と開拓団が満州へ送りこまれました。独身男性にはお嫁さんも世話しようと、全国の村役場に「大陸の花嫁募集」のポスターが張られ、村長や村の職員が適齢期の女性の家を回っては口説いたものでございました。

このようにしてソ連の侵攻に備えまして国境に近い場所や、日本の侵略に抵抗する中国や朝鮮のゲリラ根拠地に近い危険な地域を中心に、合わせて1200箇所、敗戦直前に男たちが根こそぎ動員で兵隊に取られましたが、あとに残された開拓団の婦女子を中心とした日本人が32万人もいたのでございます。さて、ここで1945年の８月９日、大変な騒ぎが起こりました。

1945年８月９日といえば、日本では広島に次ぐ２発目の原爆が長崎に落とされた、あの日の朝でございます。夜明けとともにソ連の大軍が国境を越えて攻め込んできたのでございます。これを迎え撃つはずの関東軍は、その４年前に始めた太平洋戦争で負けいくさが続きましたために、アメリカ、イギリスとの激戦地・南方へ次々と主力部隊を持っていかれ、満州の関東軍はもう張子の虎同然になっていたのでございます。そのため、まずソ連国境の各地では、関東軍だけではなく、開拓団の女性や老人、子供たちの凄惨な悲劇があちこちで数多く発生いたしたのでございます。

■ トーチカ内で火だるまに

たとえば東の国境を流れるウスリー川を見下ろす虎頭（ことう）、虎の頭と書きますが、その町はずれには、地下3階まで厚い鉄筋コンクリートで固めた日本軍の堅固な要塞がございました。ここを守っていた1500人の兵士と、近くの開拓団から避難した老幼婦女子1,000人は、激戦のあげく、この要塞の中へソ連軍にガソリンを注ぎ入れられ、火をつけられて全員犠牲になったのでございます。

そこから200キロほど西に密山（みつざん）という町がございますが、後日、その駅頭で泣いていた女の子が中国人に育てられ、60年たった一昨昨年6月、親も身元もわからないまま残留孤児として育てられたAさんは、63歳になって日本に帰ってまいりました。一緒に帰国した息子夫婦と二人の孫と5人家族で現在、すぐそこの西幕張の県営住宅で暮らしております。この密山もまた多くの日本人が亡くなり、多くの残留孤児が発生した町でございます。

この密山からさらに西へ行ったところに哈達河（ハダホ）開拓団が入植しておりましたが、ここから避難した1300人もまた大変な苦難にぶつかることとなったのでございます。各地の鉄道はソ連軍が侵攻を始める直前に関東軍の将校たちの家族をいち早く運んだ後、ソ連軍の侵攻を遅らせるために鉄橋などを爆破して逃げたため動かなくなっておりました。そのためにこの開拓団は180台の馬車で避難を始めるほかなかったのでございますが、空からソ連の戦闘機に機銃掃射を浴びせられ、馬も馬車もやられて多くの犠牲者が出、折からの豪雨の中、ぬかるみに足をとられながら西へと向かったのでございます。死んだわが子を再び背に負う母親、道端に小さな死体を置いて手を合わせる母親。両親の死を目の前で見た13歳の長男はそこで日本刀で割腹自殺を遂げる、という場面もあったそうでございます。

避難の集団はだんだん隊列が崩れ、長くなってまいりました。このまま集団で行動しては犠牲者が増えるばかり。そう判断した団長はみんなに最後の決断を迫ったのでございます。ばらばらになって脱出に賭けるか、それとも全滅覚悟で最後まで行動を共にするか…。

「私たちを殺してください！」

足手まといになってはいけないという、女性たちが声を上げました。

ついで男たちからも、

「自決しよう！」

と言う声が上がりました。まず団長が自殺のお手本を示すように、右手に持った拳銃でこめかみを撃ってどうと倒れました。このニュースが後続集団に伝えられますと、多くの女性たちは畑の高粱の茎を倒して死に場所を作り、髪をくしけずって衣類の乱れをなおし、子供をひざに乗せてわが子に言い聞かせるのでした。

「サ、ノンノン様のところへ行こうね」

ある夫は合掌する妻をまず正面から撃ち、続いて3人の子供を撃ち、そして他の奥さんた

ちを撃ち続けたのでございます。

こうして自決した団員のほか、「生きられるだけは生きよ」と説く医師の言葉にしたがって死の逃避行を続ける者もおりました。しかし山の中での逃避行40日、ようやくたどり着いた避難所でも犠牲者が増え、なんとか祖国の土を踏むことができた者は、1300人中わずかに25名だったそうでございます。

■ 飢え、寒さ、疫病、凌辱

こうしてこの開拓団のごく一部がたどり着いた避難所というのが方正（ほうまさ）という田舎町にある開拓団の跡地でございます。もちろん満州各地から同じような決死の逃亡をつづけたコースやたどり着いた地点はさまざまでございます。道を歩いたのではソ連軍や、かつて日本に土地を取り上げられたり、ひどい目にあった中国人の集団に襲撃される恐れもあるというので、昼は息をひそめ、夜になって道のない山中を歩き続けました。しかしその途中で力尽きて死ぬ者、河をわたるために対岸まで張ったロープにつかまりながら、みんなの荷物にならないようにと、自分から手を離して流されていったお年寄り、食べるものがなくて死んで行った子供たち、道端に黒いものが転がってるので目を凝らすと、それが何日か前に死んだ同胞だったというようなシーンが、無数に現われたのでございます。

■ 出産翌日の逃亡

松田ちゑさんは山形県天童市で結婚し、夫と長女と3人で北靠山屯（きたこくざんとん）開拓団に入植いたしました。戦争末期に夫が招集され、8月9日はこの娘を連れ、同じ開拓団で妹のように親しくしていた那須ますゑさんの家へ飛び込みました。那須さんはその前日に3番目の赤ちゃんを産んだばかりでした。松田さんにつきそわれ、生後2日目の赤ちゃんを抱いて那須さんも、あたふたと逃避行の列に加わるほかありませんでした。この開拓団は先ほどの国境地帯の開拓団とは少しちがって内陸部でしたが、しかし山に分け入り、河をわたり、あてどのない逃亡の苦労は同じでございました。そしてたどり着いたのが方正の近くの伊漢通（いかんつう）開拓団跡地でした。

日本へ帰るには、まずハルピンへ出なければなりません。しかし鉄道はストップし、以前は大事な交通手段だった大きな河、松花江を船でさかのぼるという方法も、完全にソ連軍に押さえられまして、東のソ連国境方面の開拓団は、ハルピンを目指しながらも、この町・方正へたどり着くのがやっとのことだったのでございます。しかし、ここにたどり着いたと申しましても食べるものがなく、秋から冬に向かって寒さに加え、疫病でバタバタと死んでゆきました。その上、夜な夜な、ソ連兵が女性を狙って襲いかかったのでございます。

先に逃げた開拓団の空き家といっても2つの部屋しかないところに80人が入って着の

み着のまま、筵（むしろ）をかぶって寒さをしのぐという毎日でございます。このあたりは冬、零下30度から40度になるという極寒の地でございます。毎日多くの人たちが死んでいきました。死者は冬期間、野菜を保存する地下の穴倉に入れられました。しかし幅5メートル、長さ10メートルもあるこの臨時の死体置き場もすぐいっぱいになり、その後は野外に積み上げられたのでございます。

■ この手で娘を葬れず

松田ちゑさんは「この娘を日本へ連れて帰りたい」その一心でここまでたどり着きました。しかし方正にたどり着いたところで自分も娘も病気で倒れてしまい、起き上がることができなくなってしまいました。

その年が暮れ、新しい年を迎えようとしたとき、同じ開拓団の団長さんがなけなしのお金で小さな餅を買ってきてくれました。

「正月だ、お祝いのお餅を一口食べなさい」

団長さんが松田さんの娘の口へ餅の一切れを近づけました。娘は力のない顔で嬉しそうな表情を見せましたが、もう口をあける力も残ってはいませんでした。それからまもなく息を引き取りました。その小さな娘の遺体を、いよいよ病が重くなっていた母親の松田さんは自分で外の遺体置き場へ抱いて持ってゆくことができませんでした。

「この子のために、どんなことがあっても生きて日本へつれて帰ろうと頑張ってきたのに、死んだ娘を自分の手で葬ってやれない悔しさに気も狂わんばかりでした。私は天を恨み地を呪いました」

後日、松田さんはこう語っています。その後、奇蹟的に生き延びた松田さんは、他の多くの開拓団女性たちと同じように、生きて祖国へ帰るために中国人と結婚いたしました。

やがて方正に春がやってまいりました。暖かい日差しが戻り、野の花が咲き始めました。しかしその一方で方正に新しい事態が発生したのでございます。それまで寒さで凍っていたおびただしい遺体が溶け出して、異臭が漂い出したのでございます。方正の政府はこれを放って置けず、

車に積んで近くの砲台山のふもとに運んで燃やしました。その煙が3日3晩、空に舞い上がったそうでございます。

■ 累々たる白骨の山

それから10年あまりも経ったころでございます。中国では食糧不足という事態に陥り、各人ができる限り自分の食料を自分で作るように、という政府の通達が出ました。松田さんは親しい残留婦人がやはり現地の中国人と結婚して砲台山の麓で暮らしていることを思い出し、夫と一緒にそこを訪ねて、開墾する場所を世話してもらいました。そのときのことでございます。白い人間の骨がたくさん出てきたのでございます。松田さんは一瞬息を

呑みました。
「アア、これはみんなあの時に亡くなった娘や仲間の骨だ」
松田さんは町へ戻ると、翌日、役所へ出かけ、窓口でお願いしました。
「あの仲間が成仏できるように、簡単なものでもいいからお墓を作らせてください。お願いします」

この申請は、方正の地方政府が判断できる限界をはるかに超えていました。なにしろ日本と中国はまだ国交回復がなく、それどころか侵略戦争が終わってから、日本は中国を認めず、台湾にばかり目を向けていた時期だったからです。中国では日本の侵略戦争に対する憎しみが渦を巻いていましたから、こともあろうに、そんな侵略国の国民のお墓を作るなんてとんでもない！　と考えたとしても不思議はない時代だったからでございます。そのため、方正政府のお伺いに対して、上の黒竜江省政府も判断できず、結局、北京の中央政府の判断を仰ぐことになりました。ここでＯＫを出したのが当時の周恩来総理だったと言われております。

その結果 1964年の秋、ハルピンから花崗岩の立派な墓石を船に乗せまして方正の近くの伊漢通の波止場まで運び、そこから折からの雨の中ぬかるみ道をトラックで砲台山の麓まで運びました。こうして中国政府はここに「方正地区日本人公墓」と刻んだ立派な公墓を建ててくれたのでございます。そればかりではございません。それから8年後に中国は文化大革命という大きな混乱の時代を迎えました。このため黒竜江の県庁所在地・ハルピンでは、「外国文化、古い文化を打倒せよ！」などという掛け声のもと、紅衛兵たちによって有名なニコライ堂が取り壊されたりしました。矛先はもちろん日本とのかかわりがあるものにも向かいました。日本の残留孤児を育てていた養父母たちが、自分の育てている子供が日本人であることを隠すために、その子が日本人の子供であることを証明する証拠、たとえば写真や戸籍謄本などを焼いてしまって、後日、残留孤児である証明が大変困難になった例などは数え切れないほどでございます。

この日本人公墓ができるきっかけを作りました松田ちゑさん自身も、日本のスパイだという、あらぬ疑いで3年半もの間、留置所に入れられていたのでございます。しかしこうした中国社会の激動の中にあっても、方正の日本人公墓は破壊しようとする者に指1本ふれさせずに中国政府と民衆が守り抜いてくれたのでございます。そしてこのお墓が、いまもって中国で唯一、中国政府が公認の日本人公墓なのでございます。

■　これも「歴史家に…」か？

かつてあの戦争に従事した人たちが作った戦友会や民間団体などがフィリピンやインドネシヤやロシヤなどで建立した慰霊碑がそのままに放置されているのが現在１４４あるそうでございます。これが関係者の老齢化で荒れ放題になっているため、このまま放置しておけないというので政府が国費を投入してその整理を始めることになったと、最近、報道されました。しかし中国でこのような状況の中で中国政府が建設してくれ、今もその管

理、維持までやってくれている方正の日本人公墓に対して、日本政府は今もって見て見ぬふりをつづけているのでございます。その上でこの夏には前総理が、この戦争の悲劇と直接結びついた靖国神社へ8月15日に参拝し、それを引き継いだ総理が、「歴史の問題は歴史家に任せる」などと、よくも言えたものでございます。500年後に歴史家が、これはやはり日本の侵略だった、とでも結論を出したら、はじめて中国に挨拶をしよう、とでもいうのでしょうか。

これだけの歴史を背負いながら、日本政府に無視され、この歴史を知っているわずかな団体と個人だけがこの公墓の参拝をつづけているというのは、どう考えてもおかしい、日中関係が逆流している今こそ、この方正を日中友好の原点にしよう、「方正を日中友好のメッカに」という運動がいま起こっています。

■ これが祖国か！

そしていまもう一つ、大きな運動が広がっております。敗戦後のこうした苦難の中を生き抜いてきた残留孤児たちは、長い年月、祖国日本に帰るに帰れず、1972年にようやく国交回復してからさえ、帰国することができず、それから9年後にようやく帰国できるようになった時はもう働き盛りを過ぎていました。なれない日本語を覚えようにも、日本政府が学校へ通わせるのは8ヶ月だけです。それでどうして仕事につける日本語が、生活に支障のない日本語が覚えられるでしょうか。それを承知で「1日も早く仕事をしろ」、「生活保護ばかりあてにするな」と帰国孤児たちはいま行政に厳しく迫られているのです。国の政策で満州へ行かされ、敗戦で異国に放置され、年老いてようやく祖国に帰りついたら、厄介者扱いです。いくらなんでもひどすぎる。こんな祖国がどこにあるのか！　と、この帰国孤児たちが国の責任を問う裁判が今、日本全国15の裁判所で行われているのでございます。この暮れに神戸地裁でまず判決が出、引き続いて来年1月31日には東京地裁の判決が出るわけでございます。

憲法9条を守る戦いは、あの戦争が60年前に、日本に甚大な惨禍をもたらしただけではなく、それから60年たった今なお、このような苦しみを国民に与えている、という問題としっかり結びついているわけでございます。今日のこの決意を日本の過去と将来にしっかりと結び付けたいと思うわけでございます。本邦初公開、時局講談「天を恨み　地を呪いました」のご清聴、まことに有難うございました。

≪ボランティアを求めています！≫

当会の事務局といっても本当に手薄です。若手のメンバーは転勤や忙しさで休日も出張で、なかなか大変です。もしお手伝いしてもいいという方がいらっしゃるならご連絡ください。老若男女を問いません。よろしくお願いいたします。

お元気な松田ちゑさん

方正県にある日本人公墓の建立のきっかけを作ったのは、周知のように松田ちゑさんだった。方正県にある砲台山の麓に散乱していたおびただしい白骨を見て、なんとか骨を拾い、お墓を建てたいと、県政府に願い出たことが中央政府をも動かした。

奥村正雄さんの文章や、東京新聞を始めとする記事で松田さんのことはよく知っていたが、私は一度も会う機会がなかった。いろいろマスコミの問い合わせには、その都度、松田さんをご紹介していたが、ついぞお会いしないで来てしまった。いい機会があればと思っていたところ、この１０月１６日、奥村さんの案内で松田さんを訪問する機会に恵まれた。

松田さんが住む都営アパートに近づくと、松田さんが入り口付近の花壇の所で腰掛けて待っていてくださった。「もうすぐ来るころだと思ってね」との言葉だった。今回は取材ということではなく、松田さんの人生について、あえて尋ねる気もなかった。三度ほど脳梗塞を患った松田さんは、お話することはやや難儀そうにお見受けしたが、私は、ただ幸せそうな表情を見るだけで、とても満足だった。

二週間後、松田さんから手紙が来た。松田さん自身、にこにこされてはいたが、往時のことはほとんどお話されなかったことを気になさっていたのか、「きっとまた来てください。今度はお話する事を考えております。本当に申訳ありませんでした」と記されていた。昔も今もとてもこまやかなお心をもっている方なのだなと思った。

（大類善啓）

アパート前の花壇の所で待っていてくださった

微笑を絶やさない松田ちゑさん

松田ちゑさんを中に奥村（左）と大類（右）

ちゑさんとご子息の崔鳳義さん

日本に残留し定住したある中国人

～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～　　第１回

大類善啓（方正友好交流の会 事務局長）

はじめに

本編の主人公、韓慶愈は当会の顧問である。昨年再編総会のおり、韓が挨拶した際、自分が敗戦後、日本に残留せざるを得なかった当時の思いを重ねて、中国に残留した日本婦人のことを語ったところ、参加者に少なからぬ感動をもたらした。それから１年後の今年３月、総会後の懇親会のことである。15 人ほどが集まり、各自に簡単な自己紹介をしてもらった。その時韓は、中国に帰国しようとした船が広島の原爆投下、日本敗戦により再び日本に舞い戻った経緯に触れて自己紹介をしたところ、多くの人から、「そういう体験を聞くのは初めてだ。ぜひ本にしたらどうか」という意見が出た。

実は私は７年ほど前、韓に今までの人生を語ってもらい、なんとか記録に残そうとし、テープに収め、一応テープ起こしもしていた。しかし、どのようにまとめたらいいか、勤め人としては韓の周辺を取材する時間もなく、また怠惰なこともあってそのままになっていた。ところが、今回事務局の中から、韓の記録をぜひ掲載したらいいという意見が出た。

そこで、方正の会報と、韓の戦中戦後の人生がどう繋がるのかを考えてみた。中国で残留せざるを得なかった日本婦人の思いを、単に日本人側から見るのではなく、日本に残留した中国人である韓のような人生を重ねて見るのも意味があるのではないか。そう思い、テープを起こした原稿を見てみたら、今回の掲載分量だけは、文章にまとめてあったのが見つかった。それを、今回少し修正を加えて発表することにした。なにぶん文才も乏しく、時間もなく、非力なため、韓の人生を表現するにはまだまだ不十分な点があろうかと思う。各位のご意見をいただき、ご叱正を賜りたいと思う。　　（Ｐ２５に関連記事･写真参照）

１、貧しい東北での生まれ

韓慶愈は１９２６年、遼寧省の蓋州市にある村、廂藍旗で生まれた。旗とは満州族が支配した地域を指している。当時、清朝政府が支配した地域は八つに分けられ、八旗と呼ばれていた。廂藍旗はその一つである。村には満州族や漢民族が雑居していた。

時代は清朝政府が腐敗の極を越え、すでに崩壊の兆候を見せていた。張作霖が東北地方を支配していた時代である。張作霖は当初、日本に支援されていたが土地や鉄道など満州の権益を巡って日本との矛盾が出てきており、徐々に日本との対立を深めていた。韓が生まれて２年後、１９２８年、張作霖は特別列車で北京から奉天（現在の瀋陽）に向かう途中、関東軍の謀略によって殺された。６月４日のことである。

与謝野晶子はたまたま夫と満州を旅行し、前日の６月３日夜奉天にいた。「ホテルは深夜にも汽車の出入りする汽笛や響きのために殆ど眠られなかった」（「横浜貿易日報」２８年

１２月３日」）と、当時の雰囲気を伝えている。

張作霖死後、息子の張学良が満州の支配権を握り、蒋介石と合流し初めて『青天白日旗』を掲げた。それ以前は、張作霖軍旗が掲げられていた。

韓の家は当時の多くの東北の人々と同様に貧しかった。劣悪な経済状態をなんとかしたいと、これも多くの人々と同じように韓慶愈の父・韓金山（号は蘊五と称し後半生はこの名前で通していた）は出稼ぎのために村を出た。幼少の故、韓の記憶もおぼろげだが、父は結婚しすぐに出て行ったのではないかと韓は思っている。父が２１、２歳の頃だろう。出稼ぎ先は営口市である。大きい町だ。港もあった。父は港湾労働者として日銭を稼いだ。父は３年に一度、家に帰るというほど、ほとんど営口で働いていた。

父は小学校（当時は４年までだった）までは行ったが、母・韓周氏は学校へ行っておらず、文盲だった。その後、父は営口を出て更に北の方に出稼ぎ場所を移していった。

当時の東北地方は満州と呼ばれ、人口はおよそ３千万人だった。広大な満州は、土地に比して人口は少なく、北へ行けば行くほど稼げるだろうと人々は我も我もと北に向かった。韓の父も黒龍江省に行き、ハルピンより北にある小さい町に出稼ぎ先を変えていた。その町で出稼ぎの人々とお金を出し合い、小さい会社を興した。

小麦と大豆の産地で土地も広い北満の地である。その北満の地・青崗県の県庁所在地である青崗県城は暮らしやすかったのか、韓の父は妻子をそこに呼び寄せた。家族は一緒に住む方がいいということと、祖父の負担を軽くするためだった。それまでの故郷では、祖父と父の弟である若い叔父が畑を耕していた。韓は「家は貧しく文化程度は低かった」と回想するが、周囲の状況も似たりよったりだった。

韓は９歳になって小学校に入学した。普通なら７歳で入学する時代である。入学してまもなく、その年の秋に青崗県の禎祥鎮に移った。父の仕事が定着したのだ。そこは農村地帯である。

当時は現代のように教育制度が整っているわけではない。学齢もはっきりせず、家庭の事情でばらばらだった。韓の祖父などは、「女は学校など行く必要はない」と公言する時代だった。韓の姉はやっと１２歳になって小学校に行かせてもらった。弟の韓慶愈と同じ学年だった。韓にはその姉と妹、そして弟二人の５人姉弟だった。上から２番目だ。

秋から冬にかけて、半年ほどいたその禎祥鎮から青崗県城にまた移った。満１０歳の時である。その青崗県城に４年住んだ。そしてハルピンの第一国民高等学校に入学した。

２、ハルピンでの中学時代

１９３２年に強引に日本軍部によって満州国がつくられてから、日本語が学校にも導入されるようになってきた。小学校では５年生あたりから「あいうえお」を学ぶようになった。韓の父親たちは当然のように“満州国”に抵抗感をもっていた。大人たちからは、「異民族に支配されるのは亡国の徒だ、屈辱だ」と口々に言われていた。周囲を見渡せば、日本軍人が町にいる。日本人も軍の力を背景に威張っていた。韓は極力、日本の軍人の前に

は出ないようにしていた。

それでも日本人に叩かれたり、いじめられたりする人々を見かけたり、その種の話は耳に入ってくる。日本軍に抵抗した学校の先生の中には、郊外に連れていかれ生き埋めにされたという話も入ってきた。韓の日本人に対する反感は自然に育っていった。

県長は満州人（漢族、満州族を問わず、満州に住む中国人を指していう）だが、副県長は日本人である。五族協和という謳い文句とは裏腹に、副県長の方に実権があった。要所要所には必ず日本人が配置されている。

韓が入学した４年制のハルピン第一国民高等学校は有名校だった。韓がいた小学校から、その学校に入学したのは二人だけだった。満州には、工業科、商業科、農業科しかなった。韓は機械、電気、土木がある工業科に進み、土木を専攻した。１９４１年、満１５歳の時である。

生徒のほとんどは漢族だった。満州族もいるにはいたが、清朝政府が倒れてからは漢族に同化していた。他に、朝鮮人たちがいた。

１年の時の担任は島田という中国語もできる先生で、寄宿舎の舎監でもあったが、韓には親しい感情は湧かなかった。日本人との交流はまるでなかった。みんな日本人に対しては「怖がっていた」という方が正しかった。日本人の先生には、普通の先生だという感覚は韓にはなかった。戦後解放された時、副校長だった日本人は殺されたという。

羅先生という中国人の先生は、国語（中国語）の担当で魯迅を教えてくれ、魯迅の文章を読ませたりしてくれた。まだ大学を出て間もない若い先生だった。みんなに慕われていたが、思想犯として監獄に追いやられた。日本の敗戦後、羅先生は釈放された。

ロシア人の先生もいた。製図の授業を受け持っていた。当時のハルピンには少なからずロシア人がいた。ハルピンは，「東方のパリ」といわれるぐらいきれいな街だった。ロシア人が経営する下宿もあり、金持ちの生徒はそんなロシア人の下宿に住んでいた。

韓から見ると、ハルピンのロシア人の若い男女は「かっこ良かった」。歩調を合わせて歩く姿に惚れ惚れとした。日本の軍人たちが慰安婦のいる場所に並んでいる姿を垣間見ることがある。ロシア人と日本人の、その対照的な姿が韓には今でも焼きついている。

こういう状況の中では、前途に明るい気持ちを持てという方がおかしい。４年の中学を終えて建国大学に進学するというコースはあったが、これとて満州国が国家に役立つ人材をつくるということで創設された満州国の国立大学である。韓にはそこへ進学するという選択肢はなかった。

３、日本への旅たち

２年を終えて３年になった時、主任の先生から「日本に行かないか」という話が出てきた。当時、毎年一人ずつ中等学校の工業科から日本へ留学する道があった。「満州国中等学校留学生」になるという道である。

先生は「親に会いに行って、いいかどうか聞いてこい」という。寄宿住まいだった韓は、

あわただしく安達を経由して２日がかりで親元に帰って行った。

父親は賛成した。「お前はまだ若いのだから、見識を広めるため日本を見てこい」という。しかし母は反対した。「今に日本はつぶれる。日本は負ける。あんな国に行ったら殺されるかもしれん」というのだ。韓は行くつもりだった。「亡国になる日本も見てきていいんじゃないか」。韓はそんな気持ちだった。

昭和１７年５月、米軍のＢ２５による東京への空襲があった。遠いアメリカから日本に爆撃機がやってくる。母親から見れば、日本の敗戦は時間の問題に見えただろう。両親の許可をもらいに帰ったが、母は泣いた。

日本へ行くというので面接があった。校長は言った。「成績の中で日本語が一番悪い」。新しく配属された先生に、京都大学に留学した人がいた。その先生が韓に言った。「日本は木造家屋でマッチ箱のようなものだ。その点、ハルピンは進んだ現代都市だ」。そう語った後、「工業学校は３年制だ。卒業したら就職しなきゃいけない。入るなら普通の中学に入れ」とアドバイスされた。当時の日本の小学校は６年制、中学は５年制だった。

忠告してくれた徐海波先生は、「俺みたいに大学へ行けよ」と言ってくれた。進路を考える時にとても参考になった意見だった。

満州国の日本大使館に行ったが、当局は韓を工業学校に行かせるつもりだった。どうしても中学に行くというならいいが、編入は駄目だという。日本人の教育課長は、１年生からやらなければいけないという。満州に兵役はあるが、日本で勉強している限りは兵隊に入らなくていい。昭和１８年２月も末の頃である。そして３月末に正式に留学が決定した。身体検査があった。その時初めて病院に行った。中国人の先生は韓に、「健康そのものだ」と言った。

集合命令が４月８日に出た。寝具を担いで新京に集まった。新京は当時の満州国の首都である（現在は長春という名前に戻り、吉林省の省都になっている）。神社への参拝があった。韓には「猿芝居」という言葉が頭に浮かんだ。

１０日の朝、満鉄が誇る『のぞみ号』に乗った。新京から釜山まで一昼夜の旅である。引率者と韓たちを乗せた８両ほどの列車は朝鮮半島の平壌、ソウル、大田を通過した。国境を越える時には身分証明書を見せた。１１日の夕方、釜山に着いた。

降りた釜山では、朝鮮の麺を食べた。「生のニラをぶち込んだそばが美味かった」ことを韓は今でも覚えている。それから関釜連絡船の『金剛丸』に乗って下関に向かった。

翌朝６時頃、下関に着いた。税関の検査はしごく簡単だった。朝飯は駅の構内で食べ、すぐに特急に乗り東京へ向かった。２３時間ほどの旅である。４月の瀋陽は雪が降っていたが、日本に着いてみれば麦が膝まで伸びていた。満州と違い別天地だという気がした。韓は分厚いコートを脱いだ。満州では鉄道は一直線にまっすぐ伸びている。しかし日本では、列車は狭く、曲がりくねって列車は行く。立ってはいられない。

東京に着けば、さっそく宮城参拝と靖国神社参拝だ。それから配属された茨城県の太田中学（５年制の旧制中学）に行った。現在の常陸太田第一高等学校である。

４、親切な日本の友人たち

クラスの仲間はみんな韓より３つか４つ下だ。先生は「韓君は選ばれて日本に来た。日満一徳一心の満州の指導者になるために留学された」とみんなに話をした。しかし、韓はその言葉が一番嫌だった。一度もそんな考えになったことはない。しかし多くの先生はそんな考えなのだと思い、あえて反論もせず、その点は割り切っていた。

小学生の時だった。クラスメートに孫という親友がいた。その彼が孫中山の『三民主義』という本を持っていた。満州国の時代、そんな本を持っていると危ない。その少年の兄は、その本を樽に入れて地下に埋めていた。それを見せてもらったことがあった。

韓はある日、布団の中で読んだ。誰だって皇帝になれる。皇帝は龍だ。民族、民権、民生という三民主義！　新鮮な気持ちが頭をもたげた。皇帝がどれほどのものなんだ！という意識だ。

馬車に乗せられた皇帝。猿芝居で滑稽だという気持ちだった。どうしてこんな芝居をやるんだ！　馬鹿らしい！　三民主義の影響で冷めた眼で見ていた。

しかし、『三民主義』を読んでいることを密告されたら大変だ。

韓にはそんな時代認識があった。孫文は偉いという気持ちがあったから、絶対主義の日本を見ていても、当然のように醒めていた。

陰で少年たちが、「皇后とやる時は・・・」という替え歌を聴いた時は痛快な気持ちだった。天皇絶対と言いながら、皇后とのセックスを替え歌にする日本人もやはり人間だという思いだった。

すでに満州にいた時から、日本が空襲を受けているというニュースは知っていた。日本はいずれ負けるだろう。そういう眼で見ていたから、「『神の国』の日本が負けるわけはない」という考えに盲従はしなかった。

戦時体制ということで学制は、５年制から４年制になっていた。韓は日本語の勉強をがむしゃらにやった。数学、物理、英語は難しくなかった。日本語を重点的にやればいいと思っていた。中でも文法が一番良かった。奨学金は毎月４５円をもらっていた。小学校の先生位である。なかなかの金持ちだということになる。下宿代が２３円、残りの２２円に、父親からの送金もあったので時には数百円持っていたことになる。

学友との年齢差があったから、今でも同窓会で友人たちに会うと、「韓君は大きかったな」という。友人たちはみんな良くしてくれた。日本に対する悪い感情は一新された。今でも、日本に来なければ永遠に日本を恨み、抗日の思想は変わらなかったと韓は思っている。友だちも魚釣りなどに誘ってくれ、親切にしてくれたという思い出が残っている。

ただ、自分自身は満州国を認めていないのに、満州国人といわれるのが韓には嫌だった。これには、じっと我慢するしかなかった。当時の韓はまだ１７歳ということもある。大人たちとの付き合いの範囲は限られている。「神州不滅」という気持ちをもっていた人たちを知ってはいたが、左翼思想をかじったような人は周囲を見回してもいなかった。

物資は段々と乏しくなってくる。ハルピンでもそうだったが、韓は革靴を履いていた。

友人たちは下駄履きで、「韓君はいいな」と友人たちが韓を羨ましがった。いろいろな物資が配給だった。籤に当たって蝙蝠傘をもらったことがある。今でも、あの時は嬉しかったと韓は述懐する。

韓と前後して日本に来た仲間が水戸中学や弘前中学にいた。昭和１８年の秋か翌年の春だったか、その中の４人が一度、水戸に集まったことがあった。話は当然、戦局の見通しになる。仲間の４人はみんな日本が負けるという認識をもっていた。ごく自然に、「負けるのを早めるようなことを何かしなきゃいけないんじゃないか」。そんな話をした。そういうことを語れる友人たちと出会って韓は嬉しかった。

お金もあった韓は、親にも会いたくなり、昭和１８年の夏休みの７月に故郷に帰った。久しぶりに会った父に韓は、日本の先生もいいと日本での生活を報告した。父は「そうだそうだ、人間はいい奴だ」と言った。

５、迫ってきた日本の敗北

日本の敗色が濃厚になってきた。昭和２０年（１９４５年）３月１０日、東京を襲った大空襲を韓はラジオのニュースで知った。韓が下宿していた旅館にも、墨田区の小学生が２０人ほど疎開していた。大本営発表のニュースは、真相を正直に知らせていないということは薄々だがわかっていた。負けた時は「転進する」という表現をすることもわかり、なんとか発表の裏を読むようにした。

４月、アメリカ軍が沖縄に上陸した。５月、ドイツが無条件降伏した。続いてイタリアが負けた。日本の敗北は時間の問題だ。韓は、日本が負ければ満州国は亡くなり、中国が回復すると思っていた。そして、自分も中国人として認められると考えていた。

韓が日本は負けると実感したのは、７月１６日のことである。ポツダム宣言が初めて報道された時だ。「いよいよ日本が負けるというという世論作りだな」と韓は思った。希望の星が見えてきた。そんな感じだった。しかし、そんな考えや表情はおくびにも出さなかった。

日本の敗北が近づいてきたことを実感するようになってきた。同時に特高警察には警戒した。特高が韓の下宿先にもやってきた。韓が持っている本を調べに来た、と下宿のおばさんが教えてくれた。

韓は事態を冷静に分析しようとした。サイパン、グアムが陥落した。アメリカの国力からすれば、沖縄が陥落するのは時間の問題だろう。韓は、自分の態度をはっきりさせないとアメリカ人に殺されるか、日本人に殺される可能性があると思った。アメリカにつけば日本人に殺され、日本につけばアメリカ人に殺されるだろう。どっちについても殺されると思った。

アメリカは決していい相手じゃない。しかし、日本と戦っているという意味では、敵と戦う同志だ。同じ仲間だという意識はあった。

死は当時、実に身近な存在だった。水戸の空襲も見た。焼夷弾が炸裂する。花火が空一

面を覆うような感じだった。幸い住んでいた小さい町には空襲はなかったが、水戸が空襲された時はよく見えた。これじゃ日本は勝ち目はないな、と韓は思った。

６、帰国命令

夏休みに入ってしばらくすると、学校から知らせが来た。満州国政府から学校に、「留学生たちの存在が迷惑になるのではないか」ということで、留学生たちを帰国させてくれという電報が来ていたのだ。学校に出かけると校長は、まだ日本にいたいなら面倒を見てもいい、と言ってくれた。しかし韓は、帰りますと答えた。勤労奉仕のため日本にいても勉強はできない。学校を辞めても兵役に取られる心配はあった。当時満州国からは２０００名の留学生が日本に来ていた。それが逐次帰るようになっていった。韓も周りの人たちには帰国する旨を伝えた。

校長に言われて茨城県庁の教育課に出向いた。前日の空襲のため、水戸は全滅状態だった。それでも県庁はコンクリートの建物のため残っていた。「国から帰国命令が出たので帰ります」と話すと課長は、「お国の人たちに、日本は負けません、頑張りますから、そう伝えてください」と言われた。内心チャンチャラおかしいと思ったが、当然口には出さなかった。そんな課長の言葉も醒めた気持ちで受け止めていた。韓を含めた３人の留学生が校長に挨拶をしに出かけたその日、校長から家で作った胡瓜をもらって下宿に帰った。

いよいよ新潟から帰国船に乗るということになった。太田から水郡線に乗り、菅谷で乗り換えて水戸へ行き、信越西線に乗り換え新潟に出た。

太陽から降り注ぐ光は強かった。韓はその日が、とても暑い日だったことを昨日のように覚えている。

各地から集まった留学生たちは旅館に集合した。新潟にあった満州国の領事館職員から、乗船の手続きなどの指示があった。８月８日のことである。

うだるような夏の陽射しが眩しい。何もしなくても汗が吹き出るようだった。その日の朝、先輩が新聞を見せてくれた。韓は改めて、ずっと新聞を見ていないような気がした。まだ寝たかった。それでも先輩から手渡された新聞は、新しいニュースをもたらしてくれそうで、目をこすりながらもそのタブロイド版の新聞が、自分にとってなにかしら重要な記事で埋まっているような気持ちだけはした。『新型特殊爆弾、わが方損害甚大』という活字が躍っている。広島に原爆が投下された翌々日のことである。

事態の深刻さが読み取れた。出発するその日に見た新聞が、韓が初めて見た原爆報道だった。

７、一路祖国へ出港

一抹の不安を抱えながらも、午後３時頃船は出港した。翌日の午後には目的地の羅津に着く予定だった。しかし、どうも様子がおかしい。しばらくして韓は、船に軍の一小隊がいるのに気付いた。小隊はアメリカ軍の機雷や出撃に備え、船を守るという。兵隊たちは

高射砲を操縦して「目標！」と掛け声をかけている。

その翌日だった。８月１０日である。船上のマイクから、「ソ連の参戦があったので、この船は元山（オンサン）に向かう」という放送があった。

ソ連はいずれ参戦するだろう。韓はなんとなくそういうふうに見ていた。ソ連と国境を接する中国の東北で育った韓には、ソ連は「怖い国」だというイメージが刷り込まれていた。しかし、日本は部隊を南方戦線に移動していた。ソ連は虎視眈々と対日本参戦の時期を狙っていたのだ。

元山に向かっているはずの船はしかし、なかなか目的地に着かない。本来なら２０時間ほどで着くはずだが、着かないのだ。だんだんソ連の制空権に入っていくので、船はもっと南に向かうという。船上の人々の動きを見ていると、徐々にわかってきた。船には満鉄の社員とその家族が大勢乗っていた。船は暁部隊の輸送船団だった。陸軍の海上輸送船団である。

１０隻ほどの船全部に積まれていたのは日本の機械類だった。満州へ疎開するのだ。それを暁部隊が守っていく。本土決戦になったら、抗戦の基地を満州にもっていく作戦だと韓は聞かされた。満州でアメリカを迎え撃つのだろうと韓は推測した。

およそ１２００名が乗船している。だんだんと食料や水が無くなってきた。一晩で朝鮮の羅津に到着すると思っていたから、それだけの食料しか積んでいない。船上のマイクからはそんな情報が流れてくる。元山に向かうことも難しいので、「釜山へ皆さんを連れて行く」という。食糧を確保するために、これから隠岐の島に行くという。しかし、隠岐の島からも補給を断られる。どこへ行っても食糧難だ。

韓は不安と好奇心を伴いながらデッキから様子を見ていた。やっと８月１４日の夕方、鳥取の境港に着いた。そこで水と食糧を積んで再度、釜山に向けて出発した。

８月１５日、朝６時の出発である。順調に船は進んだ。しかし、１２時頃になったが、どうも様子がおかしい。なんだかわからないが韓には、後戻りしているような感じなのだ。みんなが口々に、「何だ、なんだ！」と騒ぎ出す。そうこうするうち、船はＵターンしてその夜の６時、境港に戻ってきた。

８、日本の敗戦

いろいろな噂が飛び交った。日本人の中には、乗船者の中にスパイが発見され、本土送還をするらしいという者もいた。

この間、船上で軍人たちの演習はあったが、機関砲などを撃ったことはなかった。ところが、１５ 日の午後になって機関砲を撃ちだしたのだ。韓たちはデッキにいる。それなのに、高射砲を横にして撃つ。横に撃つから砲弾は、跳ねるように軌跡を残す。兵士の中には、銃器や弾丸を海に落とす者もいる。ひょっとしたら反乱が起こっているのかもしれない、と韓たちは思った。

その夜は、境港の船上で泊まった。そして翌１６日の朝、みんなを乗せた船は出港した。

韓は今度こそ釜山に行くんだと思った。ところがまたまた方向が違う。今度は北に向いて走っている。

しばらく航行すると、陸軍中尉が重要発表を行うという。マイクから聞こえる声に耳を傾けた。マイクの主は、韓からは遠い位置にいて見えなかったが、韓は緊張した。マイクの声はこう伝えた。「我々は遂に米英に屈しました」

「屈した？」、中学生の韓にはこの言葉の意味がわからなかった。先輩に聞くと、日本は米英との戦争に負けたという。「米英に負けたというが、じゃあ中国とはどうなんだ。まだ戦争をやるのか？」と韓は思った。

仲間の留学生には二十過ぎの留学生もいた。その彼は言った。「日本は負けた。だからといって我々が喜んでいたら殺されるぞ」。

中国を侵略し満州を支配した日本は負けた。中国人たちはこの事実に歓喜の声を挙げるだろう。しかし、先輩たちは悲しそうな顔をしろという。韓はこの話になった時、「今でもそんな表情はできないよ」と語った。しかし、なんとかそういう表情をしなければならない。下を向いた動作をすれば悲しく見えるというので、留学生の仲間はみんな下を向いた。

負けた悔しさから来る苛立ちだろう。五十過ぎの男が「軍隊のバカヤロー」と怒鳴った。韓には今でも、その時の男の怒鳴り声が印象的に残っている。

日本女性たちはモンペ姿なのに、どこに持っていたのか口紅をつけている。それまで留学生に笑顔などを見せなかったのに笑顔を見せる。女の中には「アメリカ人だって日本人だって同じじゃないか。サービスするのは同じだ。商売は変らんじゃないか」というのも出てくる。その話を聞くと、年配の男たちは怒り出す。船上はパニック状態だ。

そんな喧騒をよそに、船は１６日の昼過ぎ敦賀に入港した。

９、再び日本へ

韓たちにしてみれば二度と再び、日本に上陸するとは思ってもいなかった。まるで予想もしなかったことである。心の準備はさらさらない。

韓のような中国人で心の底から日本を応援している者はいない。中国人としての民族意識をもっている韓たちにとって日本の敗戦は、確かにほっとするものだった。

船が接岸した。「皆さん、先に上陸してください」と船長に言われ、留学生たちは満鉄に属する日本人たちと別れの挨拶をした。たいした深い付き合いがあるわけではない。しかし、一週間ほど共に不安を抱えた日本海での漂流の後である。少しばかりの感傷もよぎった。が、それも次の課題で消えた。「さァ、これからどうするか」。

そんな不安をもったが、韓には大学生の先輩たちが一緒にいる。彼らに従っていけばなんとかなる。さして心配することはない。実際、先輩たちについて行くしか今のところ道はない。ともかく当座は日本で食っていかなければいけない。船長が敦賀に船員倶楽部があるから、そこへ行ったらどうかとアドバイスしてくれた。留学生たちはその船員倶楽部に向かった。その道すがら、歩く通りには、アメリカ軍の空襲でできた穴がいくつもある。

その窪んだ所に水が溜まっている。ぼうふらが湧いて蚊がたくさんいる。

通りには誰もいない。寂しい８月の港町である。

歩いて着いた船員倶楽部には管理人がいた。困っているなら泊まってもいいと言ってくれたが、食べ物はありませんよという。しかし、岸壁の倉庫には大豆があるかもしれない。無くてもその倉庫の辺りには、こぼれている大豆があるから取ってきて食事にしたらいいと言ってくれ、箒と塵取りを貸してくれた。行ってみたが大豆はこぼれていない。それでも、魚を売っていた。それを買って先輩のお兄さんたちが料理をしてくれた。船員倶楽部にも長くいられるわけではない。夜はシーツを出し、それを体に巻いて寝た。蚊が多く、シーツが蚊の血で真っ赤になっていた。

その夜は敦賀に泊まった。が、敦賀にいても食糧問題は解決しない。さて、どうするか。中の一人が大きな声を出した。「そうだ、京都だ！」。京都は空襲を受けていない。京都なら食糧もあるだろうとの意見に、みんなは頷いた。

敦賀から京都への汽車には、人はほとんど乗っていない。

４０人ほどの留学生たちは中隊と呼ばれ、その下に４つの小隊が編成されていた。中隊長は東京大学の英文科の留学生。韓が所属した小隊は５、６人、隊長は東北大学の留学生だった。

京都までの汽車賃はタダだった。京都には満州から来た学生のための寮として吉田寮があった。京都大学のそばにある吉田山の近くだ。そこにいた留学生たちは韓たちを歓迎するどころか、迷惑そうに見る。泊まる場所はある。しかし、韓たちがいれば、それでなくとも少ない食糧を奪うことになる。「難民のような、流浪の民みたいなものだったからねェ」往時を思い韓はそう呟いた。

先輩たちが話し合いをした。仕方が無い。二、三日ここに泊まって東京へ行こうということになった。京都だからといってはしゃぐということもない。平生なら観光をしようということにもなるだろう。だが彼らは、空襲されていない京都の町をただ散歩して時間をつぶした。

日本人との敵対関係はなかったが、不安だった。そんな状況を考えると、当時「日本が負けて良かった、という気持ちを顔に出すな」と言った先輩はえらい、と韓は今でも思っている。

京都から東京までの汽車の旅は人で犇めき合っていた。復員軍人が大勢乗っている。汽車から見る町はどこも瓦礫の山だった。２年前の４月、好奇心をむき出しにして東京へ向かった列車の旅。それは下関から東京までの２３時間の旅だった。今、８月の暑い季節、半ば廃墟の街々を東京へ進んだ。

１０、東京での生活

やっと東京へ着いた。目指したのは飯田橋にある満州会館である。現在その場所は、かつての中国風の建物は壊され、日中友好会館が建設されている。留学生のためのきれいな

寮とホテルが併設され、中国語学校もあり、日中友好の拠点のような場所になっている。

その満州会館も爆撃され半分は焼かれていた。窓枠もひん曲がっている。夏だから部屋に少々風が入っていても構わなかった。厳しい状況だろうと予想はしていたが案の定、食糧は無かった。現在のように電話でいろんな所に問い合わせる状況でもなく、流言飛語が氾濫していた。

満州からの留学生は各地に散らばっていた。高等工業学校や高専の学生は、盛岡に疎開していた。中国人たちは高粱を食べる。当時、満州で採れた高粱は日本に運ばれていた。高粱は食料にいろいろ使える。アルコールを作るという方法もある。誰かが盛岡には高粱があるんじゃないかという。備蓄もあるんじゃないか。東京には何もないが、盛岡には何かがあるはずだ。そこで２０人ほどが盛岡に向かった。韓もその一人だが、中には俺は盛岡には行かないという人も出てきた。

韓たちはまだ中学生である。大学生のお兄さんたちに、お前たちはこうしろ、ああしろと言われれば、それに従うしかなかった。自分たちで意思表示できない一番弱いところだった。

自分は行きたくないといえば、その後どうするか。自分たちでどうこうする力は持ち合わせていない。盛岡へ行こうといえば就いていこうということになる。

盛岡に行ったのは秋だった。盛岡ではお寺が留学生の寮になっていた。報恩時という大きな寺があり、みんなそこに落ち着いた。すでに浜松高専などの留学生たちが来ていた。

寮長は山田先生だ。ここでも食糧難のため買い出しをした。盛岡はリンゴの産地だ。しかし交換するものがない。宮古にはスルメがあるというので、蒸気機関車に揺られ宮古へ行く。そうやって飢えを凌ぎながら、盛岡ではのんびりとして過ごしていた。

そうこうするうちに満州国大使館が解散するということになり、大使館の係官が盛岡にやって来た。当時、東京の丸の内にあった康徳会館の中に大使館があった。いるのは留守部隊、解散するに際して、大使館にあった金を処分することになったのだろう。日本人たちだった。

留学生たちに、お前たちも大変だろうとお金をもって来たのだ。各自にそれぞれお金が配られた。韓はその時、千四、五百円はもらった。田舎では数百円で家が建つ時代である。学生時代は官費で毎月４５円をもらっていた韓だが、大使館からもらった金は３年分に近い金額だった。大使館の役人が猫ばばしてもわからなかった状況である。今にして思えば考えられないほど良心的な大使館員だった。しかし、こんなにお金があっても使い道がないのだ。

中国に帰っても使えるわけがない。使う方法を考えようということで、韓たちはまだ見たこともない北海道へ行くことを思いついた。函館に友人がいたので、中学生の仲間二人と出かけた。その函館の友人の案内で名寄や登別温泉に出かけ、真冬の北海道を見て歩いたところ、山東半島や河北省から労働力として日本に強制連行された中国人たちが、いたるところにいた。炭鉱にも大勢の中国人がいたことを、韓たちはこの旅で知った。

方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

――「方正友好交流の会」へのお誘い――

中国ハルピン市郊外の方正県に、日本人公墓が建立されているのをご存知でしょうか。1945年の敗戦のさなか、祖国を目指して逃げ惑った旧満洲の開拓団の人々は、難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々がこの方正の地で息絶えました。それから数年、累々たる白骨の山を見た残留婦人が骨を拾い集めました。そして力を貸した中国人たちが集めた遺骨はおよそ五千体ともいわれています。

その人たちを祀るお墓が「方正地区日本人公墓」です。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれ、公墓が建立されたのです。多くの日本人開拓団員等が犠牲となった旧満洲で建立されている公墓はこの方正にあるものだけです。(黒龍江省麻山地区でソ連軍の挟撃に遭い、四百数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も１９８４年に建立され、この方正の地にあります)

この公墓の存在は、残念ながら一部の関係者にしか知られていませんでした。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を多くの人々に知ってもらおう、そして維持管理の面でも日本が協力して活動していこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は１９９３年に設立され、２００５年６月に再発足しました。この日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に、少しでも光を当てることができればと活動を続けています。

方正友好交流の会　事務局（大類善啓）

101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６　（社）日中科学技術文化センター内

電話　03－3295－0411　FAX 03－3295－0400　　E-mail：ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号　00130－5－426643　　加入者名　方正友好交流の会

《執筆者及び関係団体の紹介》

吉川雄作さん（Ｐ５、「日中友好交流と歴史検証の旅に参加して」）

札幌市出身、６９歳。高校で国漢の先生を長く勤め、漢詩や中国文学に関わってこられました。これまで中国旅行も西安や九寨溝など古都や名勝地などへは行かれていますが、東北への旅は今回が初めて。中国語は朝日中国語講座などで学び、今春からスタートした地域の病院の学習会に参加する他、４０年間「千葉の干潟を守る会」に関わっておられます。

加藤文子さん（Ｐ１０、「中国東北地方への旅」）

現在住んでいる国立市で、中国帰国者の方たちと「中国帰国者の会」の鈴木則子会長に出会ったことがきっかけで、1995 年ごろから活動に加わり、文京区の後楽園教室などで日本語教室を、また、国立市公民館の一室をお借りして、生活相談などの活動を行う国立の生活相談スタッフの一員。また文京区にある「中国帰国者の会」事務局のメンバーであり、理事としても活動されています。

高橋健男さん（Ｐ１３、「風化させてはならない歴史事実」）

高橋さんについては、Ｐ５０の書籍のご案内の項に著作と共に紹介いたしました。

NPO 法人「中国帰国者の会」について

「中国帰国者の会」は、残留婦人として 1978 年にやっとの思いで帰国した鈴木則子さんによって 1982 年に設立されました。帰国の手続きが煩雑な上、身元引受人などの制度があるため、祖国へ帰ることを切望していてもそれを果たせない残留婦人、残留孤児の帰国を実現させるためであります。設立後は、帰国手続きの援助を初め、帰国後の自立までの支援活動などを多くの学生ボランティアや社会人ボランティアと共に展開し、2004 年からは、NPO 法人「中国帰国者の会」として新たなスタートを切り、活動されています。

NPO 法人「中国帰国者の会」訪中団について

「中国帰国者の会」では、これまでにも、会の活動をより実りあるものにしていこうと、多くの学生やボランティアが訪中団として中国東北部を訪ねています。今年の訪中団は、NHK の番組「大地の子を育てて」の放映を見た方々から中日友好楼の養父母のためにと、「中国帰国者の会」に寄せられた寄付金を直接届けることが目的とのことでした。今回は会員で早稲田大学修士課程在学中にも調査、研究のために養父母楼を訪れ、修士論文としてまとめられた小田美智子さんも加わり、同じく会員の江原泰子、岡田翠、そして加藤文子の４人で養父母楼を訪ねられました。

旅行の計画中に、鈴木会長から、方正県の日本人公墓をぜひ訪ねてお参りしてきてほしいと言われ行程に加え、方正の公墓を訪ねることになりました。

ありがとうございました

今年（06年）３月総会後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を記して感謝の意に代えます。ありがとうございました。（敬称略、受付けた順に記載しました。０６年１１月２０日現在です）

杉田春恵　石原健一　斉藤兵一　新田徳六　西田八郎　松居りゅうじ　鈴木春夫　武照舎　山村文子　野口武　鈴木敏夫　田中信雄　長田長作　阿部寛　金丸千尋　遠藤勇　芹沢昇雄　奉天会　久保祐雄　保阪正康　永瀬明子　塚原すみ子　佐藤良夫　吉岡稔　大石田町日中友好協会（山形県）　崔鳳義　崔岩　川合継美　鍵山辰馬　河戸道子　山口和子　神田幸子　栗原貞子　小坂珠訪子　神田直次郎　金子静子　高尾翠　森川忍　石井愛輝　赤沢富子　伊藤州一　渡辺貴美子　大崎やま子　穂苅甲子男　渡辺淳一　富永長左栄門　野田良雄　勝尾修　菅原三太郎　山田弘子　香山磐根　古賀勇一　㈲アンポサービス（法人会員）　小栗勝則　今村春江　中澤道保　永原今朝男　松尾政司　小堀孟　山之内伸一郎　長掛芳介　山本義輝　中謙吾　手塚清美　駒ヶ嶺法子　加藤重幸　中井詔太郎　鈴木幸子　野田尚道　高橋健男　樗沢仁　竹田絢子　大槻瀬平　成田晃一　木村直美　池宮城克子　磯部荀子　河野義男

書籍のご案内

方正友好交流の会が編集した２冊の本と会員の関係著書をご紹介します。

＊　**『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』　定価 1500 円**

この本には、日本人公墓の建立の軌跡や由来を王鳳山と奥村が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み全身全霊で稲作指導に捧げ「日中友好水稲王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り、帰国後日中友好運動に携わり、麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類が執筆、また方正友好交流の会を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進行した記録などが収録されています。

＊　**『日本と中国　その底辺を翔けた 70 年』　　石井貫一　編著　定価 2000 円**

再編前の会長であった石井貫一氏の中国国家友誼賞受賞を記念して刊行されたもの。方正に対する石井氏の熱い思いとその足跡、今後の指針などが綴られています。

＊　**『天を恨み　地を呪いました　－中国方正の日本人公墓を守った人々－』**

奥村正雄　編著　定価 700 円

この本に書かれた文章は、上記の『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」―ハルビン市方正県物語』にも収録されていますが、日本人公墓建立の契機を作った残留婦人・

松田ちゑさんの息子さんの貴重な体験記も入っています。この本に関しては、直接、奥村に申し込んでください。電話　043－272－9995　FAX　043－272－0214

＊　『二つの祖国　ある中国残留孤児の証言』　　北澤博史　著　定価 1500 円（税別）
製作・発行　夢工房

著者の北澤さんは 1935 年長野県赤穂村で生まれ、1940 年両親に連れられ満洲へ。敗戦とともに孤児となる。この本は北澤さんの自伝的な作品で、方正県での当時の様子や難民となった苛酷な体験を絵と文で描写されています。収録された絵がなんともいえず当時の雰囲気を醸し出しています。直接下記の北澤さんに申し込んでください。

〒250－0001　神奈川県小田原市扇町 1 －21－10　電話 0465－35－2531

＊　『赤い夕陽の満州にて　「昭和」への旅』　　高橋健男　著　定価 3400 円（税別）

著者は 1946 年、新潟県見附市生まれ。長年中学の教員として過ごし、校長を経て定年退職。近年アジアに目を向け、歴史や文化を研究。本書は「昭和は終わっていない」という問題意識の下、満蒙開拓という国策とそれに加わった人たちの軌跡を追求した大著です。本書をご希望の方は直接、刊行先の新風社販売部に申し込んでください。電話 03-3746-4648　FAX 03-5414-3494 です。

編集後記

この６月のことである。仕事で付き合いのある知人の中国人が大連から電話をかけてきた。「いやぁ大類さん、びっくりしたよ。中国最大のインターネットの検索サイトで、方正のことが出ていて大類さんの名前も出ているよ」と教えてくれた。そこで初めて、『国際先駆情報』に記事が出ていることをインターネットで知った。まさにインターネットの時代だと実感した。大連の知人も方正の公墓について初めて知ったという。

縁は続く。この夏、大連で３年ほど過ごした K さんが同じ仕事仲間になった。K さんは前述の大連の知人とも顔見知り。その K さんの大連仲間に、今回原稿をいただいた猪瀬さんがいた。K さんが「私の大連での知人がこんなことをやっていますよ」と教えてくれたのだ。

小さい輪がだんだんと大きく広がっていくようだ。方正の公墓がこうやって徐々に人々に知られてくるのはとても嬉しい。　（大類）

《表紙写真撮影・奥村正雄》

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第３号）　2006 年 12 月 1 日発行
発行：方正友好交流の会　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町 3－6　日本分譲住宅会館 4 F
(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会